

社会統合と差異化の狭間で

— 古代メソアメリカ文明における都市の起源 —

村上 達也*

古代メソアメリカでは、都市化が辿った道筋は1つではなく地域によって違いがあった。統治者を含む特権集団を中心に都市が組織されていたと考えられるメソアメリカ東部（特に太平洋岸とメキシコ湾岸地域）とは対照的に、中央メキシコでは水のシンボルイズムが人びとを統合する中心的な役割を果たした。水を貯めることのできる施設を伴った主要建造物が建設され、嵐の神の象形壺を使い雨や豊稔を祈る儀礼が行われていた。形成期中央メキシコ（紀元前800年～紀元後250年）で最大の都市の1つ、トラランカレカでは、こうした水と関連した儀礼施設の建設と儀礼実践は、都市全体を統合するメカニズムであったと同時に、都市を構成する下位集団においても繰り返された。つまり、異なる規模で繰り返された建設活動や儀礼実践が、都市の拡大を可能にしたメカニズムの1つだと考えられ、テオティワカンを含む後の時代の都市へと受け継がれていった。本論では、この中央メキシコの都市伝統の起源を、より早い時期に発展したモレロス・グレロ伝統との通時的・構造的比較を通して探っていく。具体的には、地続きで歴史的に交流の深い複数の地域をまとめたマクロ地域（macroregion）を主な分析スケールとし、その構造がどのように変容していったのか、中央メキシコとモレロス・グレロの両伝統の歴史的な繋がりを紐解きながら考察する。そして、マクロ地域の統合と差異化という視点から都市の起源を検証する。

キーワード

中央メキシコ、モレロス・グレロ、都市の起源、マクロ地域

目次

I はじめに	4 チャルカツィンゴの土器編年
II 都市を定義する——「住むパースペクティブ」と「建てるパースペクティブ」	V モレロス・グレロ伝統の盛衰
III 中央メキシコにおける都市形成史と問題の所在	1 モレロス・グレロ・マクロ地域における統治構造
IV 中央メキシコの編年を再考する	2 チャルカツィンゴにおける社会統合
1 トラランカレカにおける都市化の過程	3 モレロス・グレロ伝統の終焉
2 トラランカレカにおける形成期中期の編年	VI 中央メキシコ都市伝統のはじまり
3 メキシコ盆地における形成期中期の編年	1 中央メキシコ都市伝統の特徴と多様性
	2 「水の山」の建設と都市の起源
	VII 社会統合と差異化の狭間で

* テュレーン大学

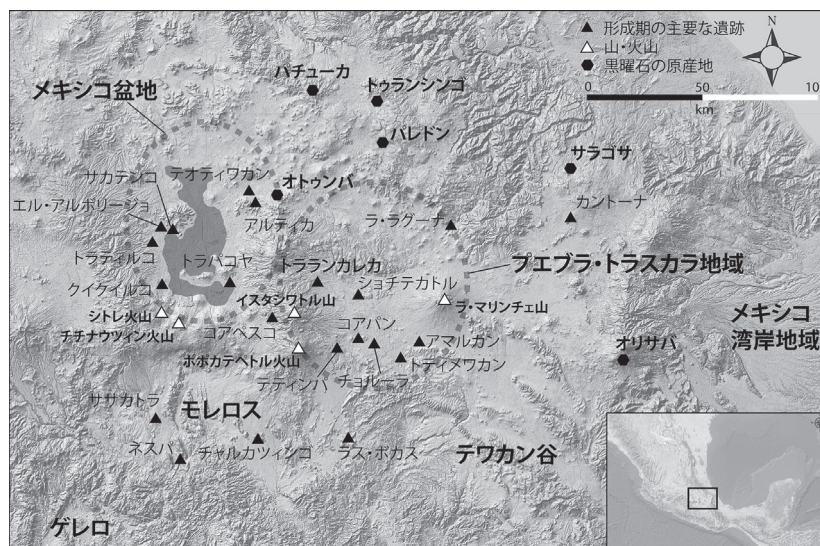


図2 形成期中央メキシコの主要な遺跡

たがってテオティワカンの起源も当然メキシコ盆地にあると無意識に想定された（嘉幡・村上 2015; 嘉幡他 2014）。さらに、メキシコ盆地の西・南・東に聳える山脈が心理的・認知的障壁となり、メキシコ盆地を一つの自律した、あるいは自己完結した地域と見なしてしまったことも大きいだろう。ウィリアム・サンダース（Sanders 1965）は生態学的な視点からメキシコ盆地を共生が成り立っている地域として特徴付け、その視点は他の研究者にも共有されていった（Wolf [ed.] 1976）。しかしながら、近年の研究から、少なくともメキシコ盆地とその東に位置するプエブラ・トラスカラ地域（図2）は、土器や建築、それらの変化のタイミング、そして宗教に至るまで、かなりの文化要素が共有されていたことが分かっており（Carballo 2016; Lesure et al. 2013; Murakami et al. 2017）、メキシコ盆地とプエブラ・トラスカラ地域を合わせて一つのマクロ地域として設定することで、社会変化の様相が少しずつ見えてきた。「不確かな道筋」からは脱却したと言える。もちろん、メソアメリカ全体、そしてテオティワカン谷（あるいはメキシコ盆地）という両端の規模の分析ユニットも重要であると考えるが、議論が抽象的になりすぎない程度の中位のレベルが両端を繋ぎ、さらにモデルとデータを繋ぐのに必要だと筆者は考える。本論ではこの中位のレベルをマクロ地域として設定する。また、文化史的重要性に加えて、都市化のプロセスを理解するには集落単位と同時に地域・マク

ロ地域の視点が欠かせない。本論では、マクロ地域がどのようなプロセスで社会的に統合され、その中でいかにして差異化が生み出されたのかに注目する。そして、マクロ地域の統合と差異化という相反するプロセスの中で、どのように都市が生まれ発展していったのか検証する。以下ではまず、都市の定義についてまとめ、中央メキシコにおける都市化の研究を「確かな」方向へ一歩進めたい。

II 都市を定義する——「住むパースペクティブ」と「建てるパースペクティブ」

都市研究は当然考古学に限られるわけではなく、人文社会科学全般で主要な研究分野の一つとして発展してきた。学問分野ごとに都市の異なる側面が強調されているため、共通した定義は存在しない。しかしながら、社会学者ルイス・ワース（Wirth 1938）の定義が広く、特に考古学では浸透している（Blanton 1976; Saunders 1985; Smith 2020; Yoffee and Terrenato 2015などを参照）。すなわち、多くの人口を擁し、人口密度が高く、多様な集団から成る定住集落とする定義である。ワースの論文のタイトルにもなっているように、都市を一つの生活様式（way of life）として定義する視点が重視されている。社会学者リチャード・セネット（Sennett 2018）が「住まう者の視点（dwelling perspective）」と呼ぶもので、シカゴ学派¹が焦点を当てた

¹ シカゴ大学を中心に形成された都市社会学の一派。人間生態学的な視点からのフィールド調査と質的研究を重視し、1920年代から30年代に全盛期を迎えた。

都市共同体に呼応する。これに対し、特に建築学では都市の形態に注目し、都市計画によって生活様式を律することができると考えられた。セネットはこの視点を「建てる者の視点 (building perspective)」と呼び²、「住まう者の視点」と対比させた。アメリカの都市研究に多大な影響を与えた活動家ジェーン・ジェイコブス (Jacobs 1961) は、この「住まう者の視点」を発展させ、人々のインフォーマルな活動や近隣住区 (近所) などローカルなレベルでの秩序の維持などの重要性を説き、ボトムアップの都市形成論・発展論を展開した。一方、歴史学者ルイス・マンフォード (Mumford 1961) は「建てる者の視点」を強調し、トップダウン型の都市計画により持続可能な社会に導けるとした。

こうしたボトムアップとトップダウンの対比、ならびに「住まう者の視点」と「建てる者の視点」の対比は、考古学における都市の定義と古代都市形成論にも反映されている。例えば、新石器時代トルコのチャタルホユック遺跡は密集した住居空間を持つことから、「建てる者の視点」から見れば都市的な形態を持った集落であるが、「住まう者の視点」から見れば住民の生活様式は相対的に均質で、分業・専業そして階層化はかなり限られているため都市的ではない。このことから、チャタルホユックを都市として定義するかについて議論が分かれていた (現在は一般的に都市とは考えられていない; e.g., Düring 2013)。チャタルホユックのように、ある側面では都市的であるが、別の側面では都市的ではないとされる集落は数多く存在する。それらの事例から、「都市」をはっきりと境界を持ったカテゴリーとして捉えることには限界があるのは明らかだろう。都市の一番の特徴である人口の多さや人口密度は量的な概念であるが、どの数字を都市の基準として定義しても、それは恣意的以外の何物でもない。それでは、「都市」をカテゴリー化以外のやり方で定義する方法はあるのだろうか。

筆者は、「都市」を複数の要素からなる現象として捉え、どの側面で「都市的 (urban)」なのか、多次元的な空間のなかで捉える方が生産的な議論につながると考える (Murakami et al. 2017)。つまり、チャタルホユックが都市なのかどうかという設問自体にさほど積極的な意味はなく、チャタルホユックのどの側面が都市的で、どの側面がそうではないのか、複数の要素

をそれぞれ検証し、通時的空間的比較の基礎とすべきだと考える。そして、都市的な要素をセネットの「住まう者の視点」と「建てる者の視点」両方から定義する必要がある。社会関係と空間組織の間に単純な因果関係はなく、そこには相互規定的な関係を想定しなければならない。この点をよりよく理解するには、ティム・インゴルド (Ingold 2000) の「住むパースペクティブ」と「建てるパースペクティブ」に注目する必要がある (出口 2017も参照)。

インゴルドの「建てるパースペクティブ」は、デカルトの心身二元論に基づいた考えで、物理的世界と意味の世界を分けて考える。人間は物理的な環境に生きると同時に、文化と呼ばれる意味の世界にも生きている。意味やデザインがまず存在し、それが「建てる」という行為に結びつく。つまり、思考が行動に先行しているという考え方だ。インゴルドは当初、この「建てるパースペクティブ」に基づいて解釈を行っていた。しかし、この視点に内在する心身二元論の問題点に気づき、「住むパースペクティブ」論を展開する。それによれば、建てる行為は心の中の表象を外在化したものではなく、環境と関わり合う中で思考や認知が発現する。つまり、「都市」という形態は、建てる行為に先行した思考によるものではなく、建てる行為自体がすでに住む行為の一部であり、都市の形態と社会関係、あるいは環境 (自然) と文化、モノと意味、身体と心といった二元論では「環境を造る」という行為は理解できない。認知科学や心理学では、思考が行動に必ずしも先行していないということが分かってきており (e.g., Tversky 2019)、機能主義的な解釈の枠組みを大胆に見直す必要がある。特に都市の起源についての研究には、この「住むパースペクティブ」は重要になってくる。当然、成熟した都市というものを見たことがない人々が建物を建て、そこに住んでいたわけであり、成熟した都市に向かって進んでいたわけではない。こうした日々の建てる・住まうという行為の中で、私たちが「都市的」と見る特性、すなわち「都市性」が立ち現れてきたのである。この都市性は、建物であると同時に生活そのものでもあり、二者を切り離していずれかの優位性を主張するのは生産的ではない。セネットの二つの視点 (もしくは観点) は、インゴルドの「住むパースペクティブ」に回収されるべきものであると

² 後述するティム・インゴルドの「住むパースペクティブ」と「建てるパースペクティブ」と区別するため、セネットの用語の訳語を変えた。訳出については八木宏明氏から有益なコメントを頂いた。ここに記して感謝申し上げたい。

筆者は考える。

都市がボトムアップかトップダウンのいずれかの意思決定プロセスのなかで造られるかという議論は、藤本強（2007）の「都市」と「都城」という考え方にも呼応する。藤本は、市場という経済的機能を中心に自然発生的に（あるいはボトムアップのプロセスで）発展した「都市」と、政治的中心地を造るというトップダウンの過程で発展した「都城」を分け、アジアの西と東での都市形成過程の類型論を展開した。これら二つの類型に、宗教的な側面を加えることも可能であろう。しかし、こういった類型論は都市の定義と同様に、恣意的なカテゴリーを作り出し、そこに多様な現実を当てはめていく作業に終始しかねない。また、議論の前提として、都市は経済、政治、宗教といった社会過程の副次的な産物であるとする暗黙の因果論が見え隠れする。これは、都市は文明や国家の副産物であるとする進化論的な考え方と通底しており、都市を社会変化（経済的、政治的、宗教的）の原動力とするセトルメント・スケーリング論とは相いれない（Bettencourt 2013; Ortman et al. 2015; Ortman et al. 2020; Smith 2019）。もちろん、なぜ人々が、あるいは異なる集団が集住形態を選んだのか、そこに経済的、政治的、宗教的な要素が絡んでいたと想定すること自体に問題がある訳ではない。しかし、単純な一方向的な因果関係ではなく、複数の要素が複雑に絡み合う循環的（recursive）な関係を念頭に置いた方が現実に即している。この議論は、ボトムアップとトップダウンの議論にも相通ずる。セネットが単純化して議論した「住まう者の視点」と「建てる者の視点」はそれぞれ単体としては不完全なモデルであり、セネットが主張するように、両者を融合していく必要がある。前述したように、これらの二つの視点はインゴルドの「住むパースペクティブ」の一部として統合することができる。

最後に、都市の定義でもう一つ重要なものが、都市と地方（田舎）の分化である。都市と田舎は同時に成立するものであり、お互いを規定しているとされている（Cowgill 2004）。都市はある地域の政治的、経済的、宗教的中心地としての機能を備えており、地方で生産される農産物によって支えられているとするモデルである。筆者はこのモデル自体が必ずしも有効であるとは考えていないが、ここで重要なのは、都市は必ずし

も集落レベルの分析ユニットのみで定義できるものではないという視点である。これまでは、ある集落の人口の大きさ、密度、社会的多様性をもとに集落の類型論が作られてきたが、集落を明確な境界を持った独立した存在として扱うのではなく、その周辺地域を含めた景観の中で都市という現象を捉える必要がある。つまり、「都市（city）」の議論（集落の類型論）ではなく、都市を現象として捉える「都市性（urbanism）」の視点が必要である。そのためには、集落から地域、そしてマクロ地域と分析ユニットを広げ、複数のスケール（multiscalar）で都市形成（urbanization）を議論していくことが重要になってくる（Duffy et al. 2013）。これまでの考古学研究で分かっているのは、都市形成は広い地域にわたる現象であるということである。多くの地域で、コリン・レンフルーの「同列政体（peer polity）」論（Renfrew and Cherry [eds.] 1986）のように、複数の集落が都市的な様相を見せており（Wright 2005）、それら複数の集落間の中で、都市形成を理解する必要がある。つまり、ある地域あるいはマクロ地域内での集落間関係のあり方が、各集落の社会変化に影響を及ぼし、同時に各集落の社会関係のあり方が地域・マクロ地域内の集落間関係を形作っている。異なるスケールの社会関係は相互に規定し合う循環的な（recursive）関係にあるのである（Ferguson and Mansbach 1996; Rosenau 1990）。都市形成論が類型論では成立しない由縁である³。本論では、マクロ地域と集落レベルの異なる分析ユニット間の関係に焦点を当てて、中央メキシコにおける都市形成論を展開したい。

III 中央メキシコにおける都市形成史と問題の所在

中央メキシコ（メキシコ中央高原）は、メキシコ盆地を中心にいくつかの地域からなるマクロ地域である（図2）。メキシコ盆地の北にはトゥーラ地域、西にトルーカ盆地、東にプエブラ・トラスカラ地域、南にモレロス地域が位置する。標高2,000メートルを超える中央メキシコは冷涼で降水量が少ない乾燥した地域であるが（Wolf [ed.] 1976）、メキシコ盆地には巨大な湖群があり、他の盆地にも中小河川や湖、湿地、湧き水

³ 記述を目的とする集落の類型論を否定するものではないことを明記しておきたい。

などが点在し、パレオインディアン期から継続して居住の痕跡が残っている（出穂 2021）。中央メキシコの東に隣接したテワカン谷では体系的な調査が行われており、乾季（11月～5月）に利用されていた小バンドのキャンプ地と、雨季（5月～10月）に利用されていた比較的規模の大きい居住地のサイクルが古期から形成期に渡って繰り返されていたようだ（MacNeish and Nelken-Terner 1983; Stark 1981）。雨季には利用可能な食料の種類も量も増えることから、この時期には人口が集中することが可能であった。この過程の中で、トウモロコシを含むいくつかの植物が栽培化されていた。オアハカ盆地では、儀礼に利用されたと考えられる成形された広場の痕跡が見つかった（Marcus and Flannery 1996: 57-59）。こうした季節的な人口の集中と拡散は、南北アメリカ大陸を含む世界各地で確認されており、季節的集住を通して社会組織の様々な可能性が試された（Graeber and Wengrow 2015）。例えば、定住農耕が定着する前の時期に建てられたモニュメント建造物が各地で確認されている。北アメリカの古期には、ある程度の専業（石器や銅製品）や、ヨーロッパでは階層化を示すような証拠も見つかっている。その一方で、定住を選んだ集団も世界各地に存在する。

中央メキシコでは、形成期前期（前1500～900年；

図3）にメキシコ盆地の湖畔に定住村落が形成されはじめる。湖西岸のトラティルコと南東岸のトラパコヤでの調査をもとに土器編年が作られ（Niederberger 1976, 1987; Tolstoy 1978）、「トラティルコ伝統」と呼ばれる土器伝統が同定されている（Grove 2000, 2016; Ochoa Castillo 2022; Santasilia 2022）。メキシコ湾岸のオルメカ様式の土器も存在するがその割合はかなり少なく（Grove 2016; Niederberger 2000）、どちらかというとメキシコ西部の影響が強く見られる。トラティルコの遺跡自体はメキシコ市の拡大に伴いほぼ破壊されているが、発掘当時の記録から、モニュメント建造物らしきものがあつた可能性が指摘されている。埋葬のデータが大半を占めており、副葬品の分析からある程度の社会階層ならびにジェンダー間の差が示唆されている（Joyce 1999）。

形成期中期（前900～500年）になると、モレロス地域のアマツィナック谷でチャルカツィンゴが地域センター（拠点集落）として発展する（Grove [ed.] 1987; Grove 2000, 2016）。モニュメント建造物である基壇は形成期前期にまで遡るが（現段階では中央メキシコ最古）、形成期中期になり長辺が70mの基壇に発展する。チャルカツィンゴで特筆すべきは、石壁に囲まれた半地下式広場とオルメカ様式の玉座（あるいは祭壇）、特定の人物を描いたと思われる石碑や石彫（Grove

2000: 143-144; Grove and

Angulo V. 1987）である。石彫の様式は明らかに湾岸オルメカのラ・ベンタのものに類似したものがある（Grove 1989）。オルメカ様式を取り入れた石彫伝統は広くモレロス・ゲレロ地域で共有されていたようである。ゲレロ州に位置するテオパンテクアニトラン（Martínez Donjuán 1985, 1986, 2010; 古手川・黒崎 2021）やモレロス州のササカトラ（Canto Aguilar and Castro Mendoza 2010; Canto Aguilar and Reséndiz Machón 2007）でも、石壁に囲まれた半地下式広場が確認されている。ササカトラ遺跡では、石壁の壁龕の中に、オルメカ様式の

時代区分	紀元前	較正前年代		較正後年代		トラランカレカ／プエブラ・トラスカラ地域（較正後）	紀元前
		ソアビルコ／トラパコヤ	チャルカツィンゴ	メキシコ盆地	チャルカツィンゴ		
形成期後期	400					テソキバン	400
	500					テシヨロック	500
	600	サカテンコ	カンテラ前期	ティコマン			600
	700		カンテラ後期			トラテンバ	700
	800						800
形成期中期	900	マナンティアル	パランカ	サカテンコ	カンテラ	ヴォンバンテベック	900
	1000			テテルパン（エル・アルボリージョ／ボンバ）			1000
	1100			マナンティアル	パランカ		1100
	1200	アヨトラ	アマテ		アマテ		1200
	1300			アヨトラ			1300
	1400			コアベスコ			1400
	1500	ネバダ					1500
	1600			ネバダ			1600
	1700						1700

図3 チャルカツィンゴ、メキシコ盆地、ならびにプエブラ・トラスカラ地域の編年（ソアビルコ／トラパコヤの較正前年代は Nierderberge 1976から、チャルカツィンゴの較正前年代は Cyphers and Grove 1987から、較正後年代はすべて Murakami 2022のデータをもとに作成）。

ジャガーの彫像が置かれていた。これらのオルメカと関係した遺物・遺構の他、モレロス・ゲレロ地域に共有されたローカルな伝統のものも多く存在する。

形成期中期の後半から（前800年以降）、モレロス・ゲレロ伝統とは異なる新たな伝統が生まれる。後の「中央メキシコ都市伝統」につながるものだ。この新たな伝統に属する集落はメキシコ盆地ならびにプエブラ・トラスカラ地域に集中している。クイクイルコ、トラパコヤ、トラランカレカ、ショチテカトル、トティメワカン、アマルカンなどが含まれる（図2）⁴。これらの遺跡では、形成期中期からモニュメント建造物が建てられ、水に関わる儀礼が行われていたことが近年の研究で分かってきた（嘉幡他 2017; 村上他 2021; Carballo 2016; Murakami 2022）。

中央メキシコの都市形成史で大きな問題の一つが、編年である。放射性炭素年代測定の較正曲線上に、紀元前800年から400年にかけて「ホールスタッツ（ハルシュタット）・プラトー」と呼ばれるほぼ平らな部分が存在する。つまり、この時期の年代はすべて2450BP前後の年代しか得られず、異なる遺跡間の前後関係がはっきりしないのである。モレロス・ゲレロ伝統全般と中央メキシコ都市伝統のはじまりの時期はまさにこの期間に当たり、これら二つの伝統が同時に存在していたのか、あるいは前者が下火になり後者が発展したのか放射性炭素年代のみからは分からないのだ。本論ではまず、トラランカレカの高精度編年をもとに、中央メキシコの編年を整理し、モレロス・ゲレロ伝統と後の中央メキシコ都市伝統との間の時間的・地理的な断絶を明らかにする。その上で、両伝統の都市化の過程の違いをマクロ地域の構造と集落レベルでの循環的な関係から検証する。

IV 中央メキシコの編年を再考する

1 トラランカレカにおける都市化の過程

トラランカレカはプエブラ・トラスカラ地域の西端に位置し、イスタシワトル山の北東の麓の丘陵の上に位置する。トラランカレカの編年は大まかに4つに分けることができる（嘉幡・村上 2015; 嘉幡他 2014, 2017; Murakami et al. 2017）（図3）。トラテンパ期（前800～650年；年代は全て較正年代）に定住村落が形

成され、居住域は分散していた。発掘調査から、この時期に属する円形の構造物が見つかった。いまだその全体像はつかめていないが、おそらくウッドヘンジのようなもので儀礼に使われていたものと思われる。次のテシヨロック期（前650～500年）になると、集住化の最初の波がやってくる。踏査データに基づくと、最低でも80haほどの集落が確立し（図4）、土器の散布率が比較的高い表面積をもとに推定すると、2,000人から4,000人ほどの人口を擁していたと考えられる（1haにつき25から50人の計算；Sanders 1965）。居住域は丘陵部の東端に位置する自然の湧水を中心同心円状に広がっていた。トレス・マリアス建築複合と建築複合Cの二地区での発掘調査から、テシヨロック期の建造物が検出されている。

形成期後期のテソキパン期（前500～100年）になると集落はさらに拡大し、最大でおそらく400～500haほどの集落に成長した（一般に都市と呼ばれる規模である）。9つの建築複合が確立したのはおそらくこの時期であろう。後の時代の活発な建築活動により、この時期の建造物の多くが破壊され、または埋められたため、この時期の建造物の様相については分かっていない。発掘調査で検出できたのは、中規模の基壇の外壁の一部と、埋納遺構一基のみである。

前100年以降から都市はさらに拡大し、推定550haの都市へと変貌をとげた（図5）。丘陵部のみならず、その北と南にも居住域が拡大した（村上他 2019; Murakami et al. 2017）。この時期は、先行研究ではテソキパン期後期（～後100年）とテナンイエカック期前期（後100～250年）という名称が与えられているが、土器や建造物の変化の動向から、別の名称を与えるべきだと考えている。本論ではとりあえず、形成期終末期（前100～後250年）と呼んでおく。

表面採集時に遺物の散布率を順序尺度（ordinal scale）で記録したものをもとにした人口推定では、6,500～13,000人の人口を擁していたと考えられる。その内訳は、高密度エリアが10ha（50～100人/ha）、中密度エリアが120ha（25～50人/ha）、そして低密度エリアが300ha（10～20人/ha）である。合計430haを人口推定に使用したが、残りの120haは超低密度エリアとして人口推定にはカウントしなかった。これはかなり控えめな推定である。例えば、400haほどと推定さ

4 ただし、古典期（後250年以降）になり、モレロス地域は中央メキシコ都市伝統に組み込まれることになる。

れているクイクイルコの人口推定は2万人ほどである (Parsons 1974)。

トラランカレカの人口は後70年頃に起こったポポカテペトルの大噴火の後も増加を続け、後250～300年に衰退するその前夜まで増加の一途を辿ったような印象がある。形成期終末期における建築活動はさらに活発になり、大規模建造物は何度も増改築された (嘉

幡他 2019)。

2 トラランカレカにおける形成期中期の編年

前述した通り、トラランカレカで集住化の最初の波がやってくるのはテショロック期であり、その前のトラテンパ期からの移行の時期を同定するのが最優先となる。建築複合Cからはトラテンパ期に属する4つの層位、テショロック期の5つの層位が確認され、これら全ての層位から炭化物を採取することができた。トラテンパ期の試料は、環濠内の自然堆積層から得られたものであるが、おそらく時期の異なる堆積によると考えられる。このうちの最終期の試料は、おそらく最終時期まで残っていた柱穴内から得られたものである。環濠はテショロック期の床面により覆われているため、攪乱の可能性は極めて低い。また、テショロック期の構造物を一部破壊し、テソキパン期から形成期終末期にかけて少なくとも3度建て替えられた基壇が確認されており、それらの3つの時期からも炭化物を採取することができた。したがって、建築複合Cでは、トラテンパ期から形成期終末期まで連続した居住面が確認されており、トラランカレカ遺跡内でもっとも層位関係が確立された地区である。建築複合Cの東側に

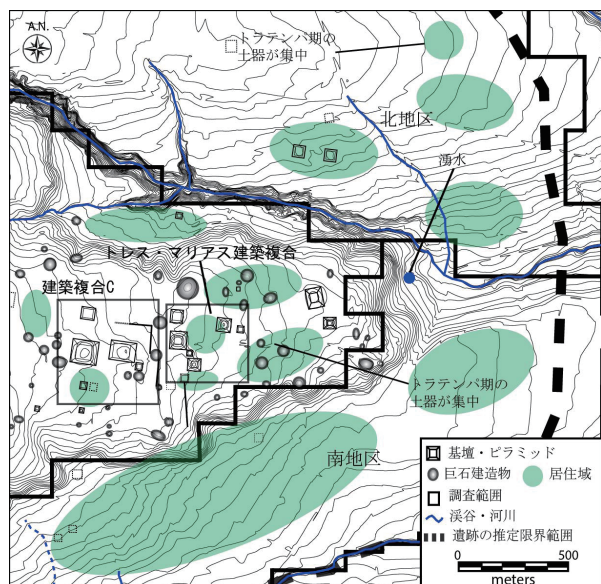


図4 形成期中期のトラランカレカ

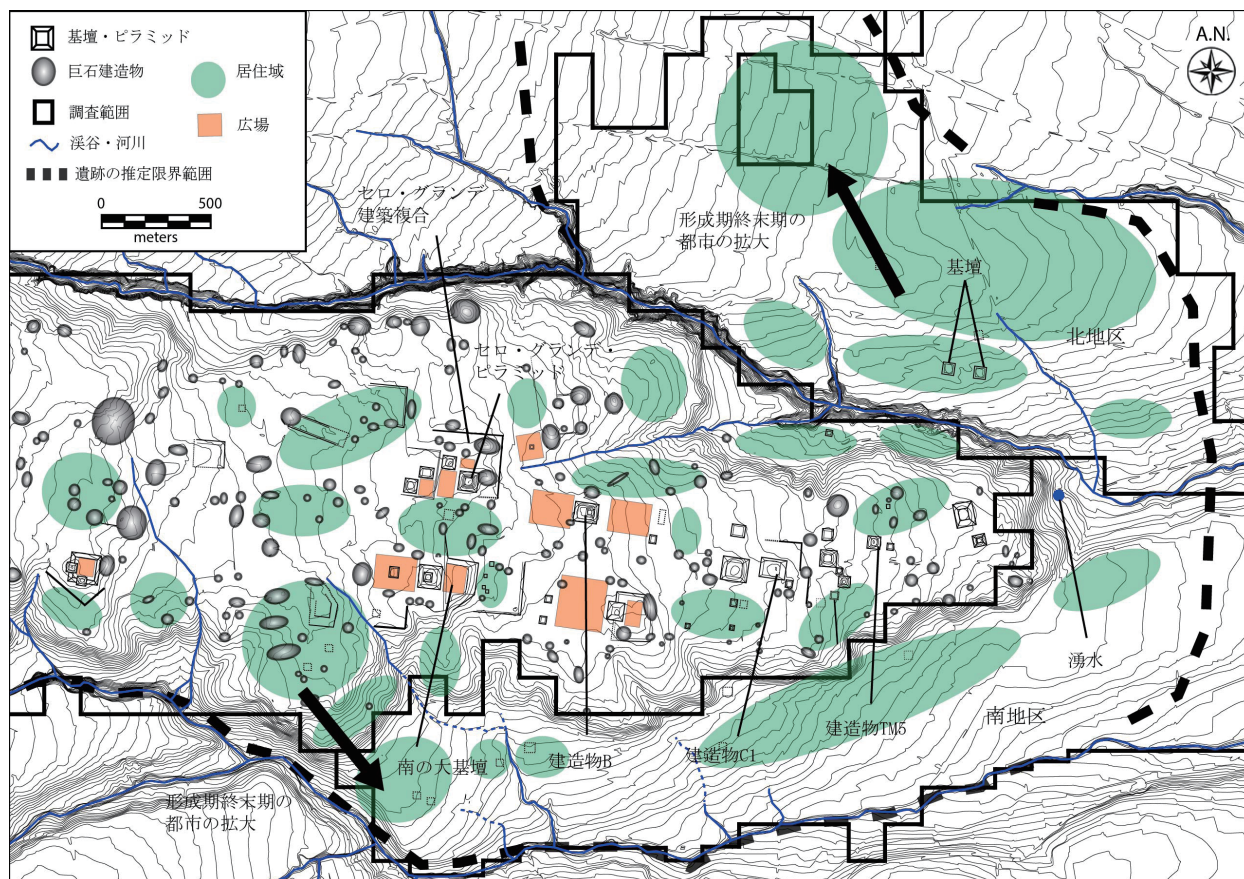


図5 形成期終末期のトラランカレカ

位置するトレス・マリアス建築複合での試掘調査からは、少なくとも9つの層位に分けられるテショロック期の居住面を検出し、その内、6つの層位から炭化物を採取することができた。これらの層位の情報は、ベイズ・モデルを作る上で鍵となる。

これらのデータを使い、OxCalのプログラムで編年のベイズ・モデルを構築した。ベイズ・モデルでは、層位の前後関係などの情報を事前確立としてモデル自体に組み込むことができ、最も確立の高い年代幅を事後確率の分布として見ることができる (Bronk Ramsey 2009; Bronk Ramsey 1995)。OxCalに付随する異なる機能を組み合わせ、さらに建築複合Cとトレス・マリアス建築複合の年代試料をそれぞれ独自に検証したものと、二つを合わせて検証した複数のモデルを作り、テショロック期の開始年代と終末年代を注意深く検証した (詳しくは Murakami et al. 2025 を参照)。その結果、当該期は前650年から前500年という150年間の時期が、現時点では最もデータに合致することが判明した (図6)。

このトラテンパ期からテショロック期への移行は、トラランカレカの都市化にとって重要である以上に、中央メキシコ全体、おそらくはメソアメリカの大部分での土器の変化と関係している。トラテンパ期の土器は、それ以前から継続していた白色土器の伝統の一部

として考えることができる。この白色土器伝統は、ロバート・ローゼンズウィグによってホライズン様式として認識されている (Rosenswig 2010)。テショロック期になると、赤色、黄褐色土器が導入される。これは中央メキシコのみならず、例えばマヤ地域でも同様に、マモム式土器として認識されている土器群がそうである。近年、猪俣らによってこの時期の編年が再考され、マモム土器の始まりはおよそ前650年程とされている (Inomata and Henderson 2016; Inomata et al. 2014)。

3 メキシコ盆地における形成期中期の編年

メキシコ盆地の土器編年は、クリスティン・ニーデルベルジェ (Niederberger 1976, 1987) とポール・トルストイ (Tolstoy 1978) によって確立されたものが長らく使われている。ニーデルベルジェはメキシコ盆地南東部に位置するソアピルコ・トラパコヤ遺跡における層位発掘をもとに、形成期前期から後期までの編年を作り上げた。その後、トルストイが盆地内における様々な試掘調査から得られた試料を年代測定し、土器編年を精緻化した。著者は別稿 (Murakami 2022) でネバダ期、コアペスコ期、アヨタラ期、マナンティアル期、テテルパン期、サカテンコ期の6つのフェーズの絶対年代を再校正した。その際、サカテンコ期から次のティコマン期への移行の年代を推定するために、

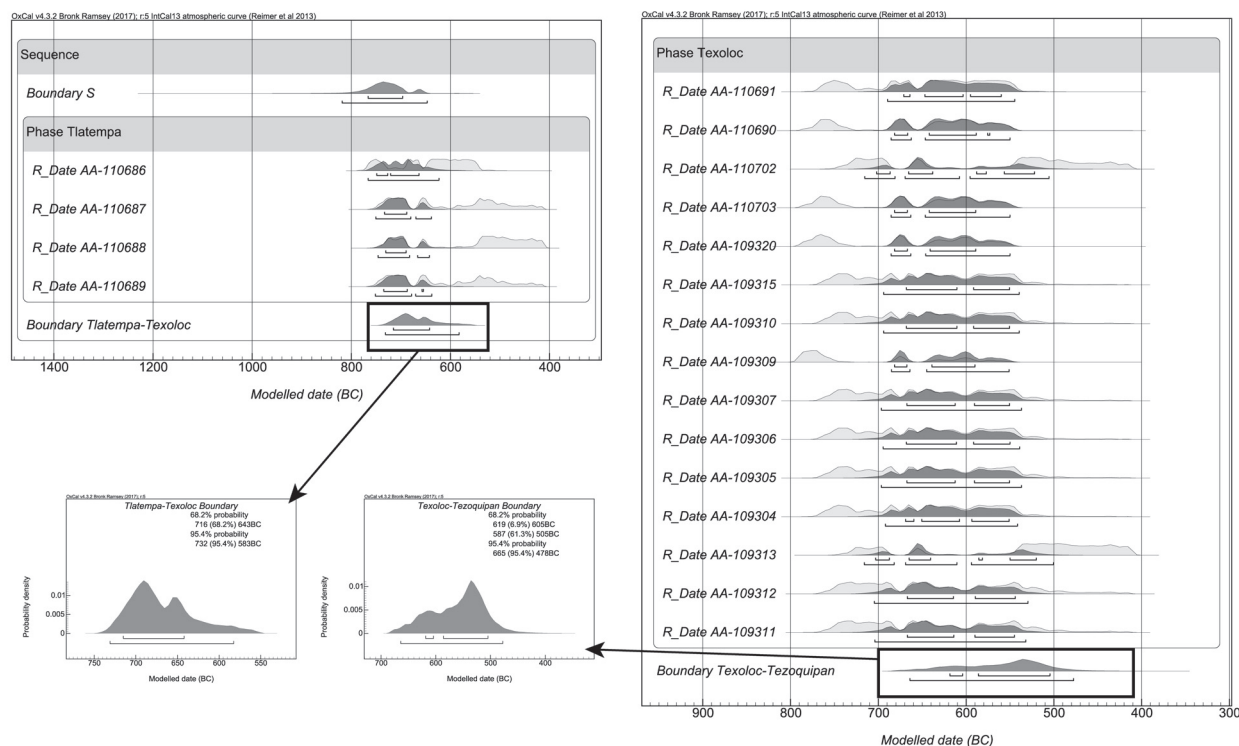


図6 トランカレカにおける形成期中期編年のベイズ・モデル
(Murakami 2022: Figure 9.2から転載)

ティコマン期の初期にあたる年代試料も組み入れた。

OxCal を使ったベイズ・モデルによると、ネバダ・コアベスコ期ならびにサカテンコ・ティコマン期の移行時期を除いたすべての年代が50年から150年ほど新しくなることが示唆された (Murakami 2022)。これらの編年の中で重要なのが、比較的明確に定義されているマナンティアル期とサカテンコ期の過渡期として捉えられているテテルパン期の年代とティコマン期の始まりの年代である。テテルパン期は同じ白色土器伝統に属するマナンティアル期からサカテンコ期にかけて変化する土器の器形 (特に底部と口縁部) の変化が顕著に観察されている。テテルパン期は、両時期の特徴が共存する移行期として捉えられている。このテテルパン期に相当するのが、プエブラ・トラスカラ地域のツォンパンテペック期である。トラランカレカではまだ出土していないが、他の村落遺跡で確認されており、およそ前1000~800年に位置付けられている (Lesure et al. 2006; Lesure et al. 2014)。筆者による再較正年代によると、メキシコ盆地のテテルパン期もほぼ前1000~800年に相当することが示唆された。さらに、白色土器伝統の最後の時期であるメキシコ盆地のサカテンコ期とプエブラ・トラスカラ地域のトラテンパ期が前800~650年に位置付けられる。

総合すると、メキシコ盆地とプエブラ・トラスカラ地域では土器の変化がほぼ同時期に起きており、それぞれを独立した地域とするよりも、二つの地域をまとめてマクロ地域として定義し、このマクロ地域における土器の変化として捉える方が理にかなっている (もちろん、その中での地域差も存在する)。土器の類似性や変化の同時代性を考慮すると、この二つの地域間の交流は相対的に密であったと解釈できる。さらに、二つの地域で行われた複数のプロジェクトから提出された年代試料が、この大きな枠組みに矛盾なく位置付けられることから、上述した推定年代の蓋然性が高い。次節では、このメキシコ盆地／プエブラ・トラスカラ地域の土器の変化を参照点として、土器編年が確立されているモレロスのチャルカツィンゴの編年の絶対年代を検証する。

4 チャルカツィンゴの土器編年

デイヴィッド・グローヴによる調査 (Grove [ed.] 1987) から、チャルカツィンゴ遺跡では3つの時期が確立されている。較正前の年代で言うと、アマテ期 (前1500~1100年)、バランカ期 (前1100~700年)、カン

テラ期 (前700~500年) である。これらの較正前の年代は、残念ながら較正後年代と混同して使用されており (例えば、Rosenswig 2010)、メソアメリカ史のなかでのチャルカツィンゴの位置づけについては、ラ・ベンタ様式の石彫があるという以外は曖昧になっている。筆者は出版されている37個の年代試料 (Cyphers Guillen and Grove 1987) を使って較正後年代に基づいた編年を構築した (Murakami 2022)。それぞれの年代試料の出土コンテキストも考慮し、攪乱層から出土したものはできるだけ排除し、信頼できるものを選んだ。残念ながら、一次コンテキストから得られた年代試料はかなり限られており、また、それぞれの時期の前期か後期なのかははっきりしないものも多い。こういった事情から、層位の前後関係についての精度はかなり低く、さらに多くの年代が較正曲線の「ホールstatt・プラトー」に位置していることから、放射性炭素年代だけで年代幅を決定するのは困難であるとする結論にいたった。ただし、いくつか異なるベイズ・モデルを構築した中で、モデル間で共通するパターンも見出すことができる (図7)。つまり、ベイズ推定によれば、カンテラ期は前750年から前700年あたりで終わるのが妥当だと考えられる。

この推定を検証するため、チャルカツィンゴにおける土器の変化を分析し、ニーデルベルジェが発掘したメキシコ盆地のソアピルコ遺跡のデータと比較した。ただし、発掘のコンテキストや方法もかなり異なることから直接の数字の比較はあまり意味がないと考え、相対的な変化について検証した。まず、白色土器の全体の土器における割合についてだが、ソアピルコ遺跡では、マナンティアル期、テテルパン期、サカテンコ期と三期に渡ってほとんど変化がない一方で、ティコマン期になると三分の一以下になる (Murakami 2022)。一方チャルカツィンゴでは、白色土器の割合はバランカ期以降、最後のカンテラ期後期まで増加傾向にあった。つまり、チャルカツィンゴはメキシコ盆地の編年で言うと、ティコマン期に移行する前に崩壊した可能性が高い。もちろん、チャルカツィンゴでは独自の土器伝統が後の時代まで続いたと解釈することも可能である。しかし、白色土器については、メソアメリカの多くの地域、特にモレロス・ゲレロと深い関係にあったマヤ南部地域 (太平洋岸) やメキシコ湾岸地域で並行した変化が観察できることから (「形成期中期祭祀複合」とも呼ばれる: Reilly 1995)、チャルカツィンゴ独自発展説は考えにくい。

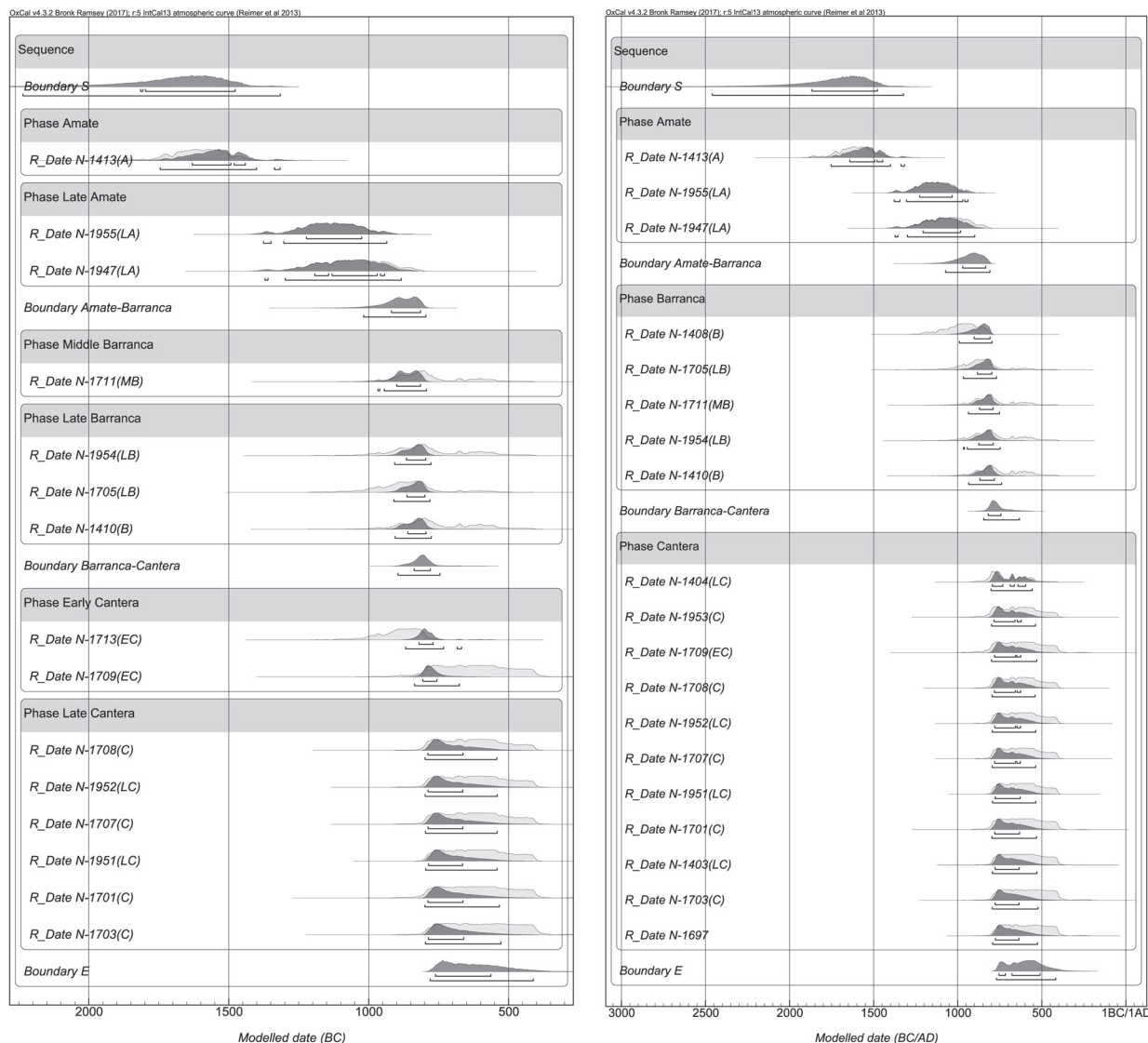


図7 チャルカツィンゴの編年のベイズ・モデル

(Murakami 2022: Figure 9.4から転載。モデル3 [左] とモデル4 [右])

器形の変化については、チャルカツィンゴの白色土器内での平底の割合が、バランカ期前期からカンテラ期後期にかけて半分ほどに減少することが判明した。これは、平底から丸底に移行するメキシコ盆地内の器形の変化と並行している。したがって、チャルカツィンゴとメキシコ盆地で少なくとも白色土器に関する大まかな傾向は共有されていた可能性が高い。この仮説が正しければ、ベイズ推定の結果が裏付けられたということになる。前述したように、ティコマン期の開始年代は前650年に比定されており、トラランカレカでの調査からもティコマン期と同時期のテショロック期の始まりは前650年と結論づけることができる。

チャルカツィンゴをモレロス・ゲレロ伝統の指標遺跡として扱うのであれば、モレロス・ゲレロ伝統と中央メキシコ都市伝統は時期的に重なっておらず、前者

が衰退したあとに、メキシコ盆地ならびにプエブラ・トラスカラ地域で集住化の波が訪れたことになる。はたして、モレロス・ゲレロ伝統に属した人々がチャルカツィンゴをはじめとするセンターを放棄し、北へ移り住んだのだろうか。それが、中央メキシコ都市伝統が形成される契機となったのであろうか。この点については、それぞれの地域の都市化の特徴を議論したあとに再度検討する。

V モレロス・ゲレロ伝統の盛衰

モレロス・ゲレロ地域にはチャルカツィンゴの他に、モレロス西部に位置するササカトラ、そしてゲレロ州に位置するテオパンテクアニトラが拠点集落（センター）として繁栄した。これらの他には、オシュ

トティランやフシュトラワカなどの洞窟遺跡が見つまっている (古手川・黒崎 2021)。ここではまず、モレロス・ゲレロのマクロ地域レベルでの社会政治構造を議論し、それが各センターの繁栄・衰退とどのような関係にあったのか検証する。

1 モレロス・ゲレロ・マクロ地域における統治構造

チャルカツィンゴ、ササカトラ、テオパンテクアニトランに共通する要素として、オルメカ (ラ・ベンタ) 様式の石彫、石板を積み重ねた独特な建築様式、半地下式広場、そしてピラミッドの欠如があげられる。同時代のラ・ベンタや太平洋岸沿岸地域 (南部マヤ) では巨大なピラミッドが建てられていたのと大きく異なる。ケント・ライリー (Reilly 1995) が「形成期中期祭祀複合」と呼ぶ文化複合の一部を形成するが、オルメカの一大センターであるラ・ベンタの支配下にあったわけでもなく、オルメカや太平洋岸の文化の影響を受けながら、独自の地域文化を築いたようである。

モレロス・ゲレロ・マクロ地域に共有された図像で特質すべきは、統治者の図像表現である。オルメカ文化にも見られる玉座も存在し、王とも呼べる存在がそれぞれのセンターを統治していたと考えられる。おそらくセンターと呼べる遺跡は他にも存在するが、調査が進んでおらずその全容は分かっていない。現在まで調査されている3遺跡を見ると、「ジャガー人間

(were-jaguar)」を表わした図像・石彫が多数存在する。この「ジャガー人間」とは、シャーマンがジャガーに変身していく、あるいは変身した姿を表現している。後古典期から植民地期にかけて見られる「ナワリズム (nahualism)」 (ナワル=ナワトル語で「もうひとりの自分」と呼ばれるシャーマニックな実践・信仰の歴史は深く、少なくともオルメカの時代から存在していたことが示唆されている (Gutiérrez and Pye 2010)。メキシコ湾岸から出土した石彫には、人間がジャガーに変身していく過程を表現したものもある。おそらく、もともとは神々に備わった能力としてナワル信仰があり、シャーマンや神聖王など、神々と交信できる人間にも同様の能力があるとされたのであろう。いずれにせよ、形成期のモレロス・ゲレロ地域では、変身する能力を持った王がそれぞれのセンターを統治していたと考えられる。

一例として、チャルカツィンゴのモニュメント31号をあげることができる (図8)。このモニュメントは遺跡中心部のすぐ南に位置する山 (チャルカツィンゴ山) の斜面に配置されている。6つの浅浮彫が施された巨石群の一部で、ジャガーが人間を襲っている様子が描かれている。しかし、このジャガーは単なるジャガーではなく、嘴とトサカを伴った鳥の顔をしている。鳥の仮面あるいは頭飾りは同じ巨石群の別の巨石にも描かれており、槍を持ち鳥の仮面を被った3人の人物が行進している様子が描かれている。また、同じ山のより上の方にあるモニュメント1号 (図9) では、洞窟の中に座っている統治者と思われる人物が描かれているが、この人物の頭飾りにも鳥が描かれている。鳥の仮面あるいは頭飾りはライリーが定義する「形成期



図8 チャルカツィンゴのモニュメント31号
(Gutiérrez and Pye 2010: Figure 2.12を一部改変)

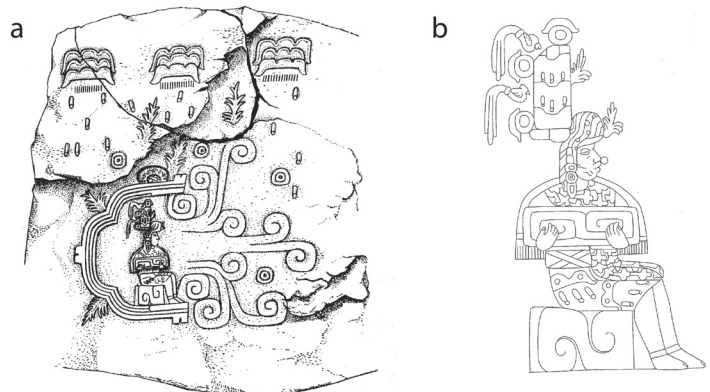


図9 チャルカツィンゴのモニュメント1号 (a) とそこに描かれている人物像の拡大図 (b)
(a: Evans 2008: Figure 6.11から転載; b: Gutiérrez and Pye 2010: Figures 2.13から転載)

中期祭祀複合」にも一般的なモチーフで、統治者や王と深く関係している。

このチャルカツィンゴの鳥の顔をしたジャガーの浮彫（モニュメント31号）には、おそらくシャーマン＝統治者がジャガーに変身し、人間を生贄に供している場面が描かれている（Gutiérrez and Pye 2010）。そして、その上に描かれているS状の雲から雨が降っている。つまり、シャーマンである統治者の儀礼によって恵みの雨が降っている様子が描かれている。類似した図像は、モレロス・ゲレロ・マクロ地域の多くの遺跡で見られ、それぞれのセンターで統治者を中心とした共同体が発展したと思われる。複数の王国が林立した古典期マヤのように、これらの共同体は競合していたのだろうか。

ヘラルド・グティエレスとメアリー・パイ（Gutiérrez and Pye 2010）は、後古典期・植民地期のナワル信仰を検証し、主要な交易ルート上にナワルの聖域（サンクチュアリ）が点在していることを突き止めた。シャーマンはこれらのサンクチュアリを訪問し儀式を行った。この聖域のネットワークは、モレロス・ゲレロからチアパス・グアテマラの太平洋沿岸部まで広がっていた。グティエレスとパイは、このナワル・ネットワークは形成期中期まで遡ると解釈している（Gutiérrez and Pye 2010: 47）。それは、前述した3つのセンターの他に、洞窟遺跡における壁画がナワル・サンクチュアリだと考えられるからだ。例えば、オシュトティラン洞窟では、チャルカツィンゴで発掘されたような玉座に座った、鳥の頭飾り（仮面）を被った統治者らしき人物が描かれている。他の洞窟ではジャガーの皮を被った人物像が描かれている。これらの洞窟は山中に位置し、センターからは離れている。ちなみに、それらの洞窟が位置する山では、現代でも雨を呼ぶ儀礼が行われている（Gutiérrez and Pye 2010: 47）。なぜ、統治者の姿が地方の山間部の洞窟に描かれたのか。統治者が聖域を訪問し儀式を行ったと解釈すれば説明がつく。

まとめると、モレロス・ゲレロ伝統に属するセンターは、ナワル信仰のネットワークによって結びついており、統治者が聖域を訪れ雨乞いの儀式を行っていたと考えられる。また、これらの統治者＝シャーマンの中には石彫や壁画を制作する芸術家も含まれていたと考えられる。グローヴはチャルカツィンゴのいくつかの石彫はラ・ベンタのものと酷似しており、両センターの間に特別な関係があったと想定している

（Grove 1989）。また、チャルカツィンゴ、ササカトラ、テオパンテクアニトラに共通した建築技法なども、シャーマンや工人の特殊な関係、あるいは交流によって生み出されたと考えることができる。これらの3つの主要センターは互いに50kmから100kmほど離れており、共通の資源を争う関係ではなさそうである。実際、それぞれのセンターが政治経済的に統合していた範囲はかなり限られている可能性が高い。次にチャルカツィンゴを例に、地域内ならびに集落内での社会統合の特徴を検証する。

2 チャルカツィンゴにおける社会統合

遺物の分布を地域レベルで見ると、チャルカツィンゴが位置するアマツィナック谷はゆるやかに統合されていたようである。アマツィナック谷で主に流通していた土器や土偶のタイプが存在することから（Grove 1987: 421–422）、相互交流を通して物質文化の様式が共有され、あるいは交易を通して同じタイプのモノが共有された。このゆるやかな地域内交流圏の中で、チャルカツィンゴ近隣地域では、もう少し密度の濃い交流圏が築かれたようである。セトルメントパターン研究から、ハースはチャルカツィンゴに統合されていたのはセンターの近隣地域、おそらくは半径5キロ圏とした。チャルカツィンゴが位置するアマツィナック谷は北、中央、南の3つの地域に分けることができるが、土器の分布から、チャルカツィンゴが位置する谷の中央部に限られて分布する土器がある（Hirth 1987: 359–360）。石器に関しては、搬入された黒曜石製石器はおそらくチャルカツィンゴで製作され谷中の共同体に流通していったと考えられるが、特に谷の南ではチャルカツィンゴからは半ば独立したチャート製品の独自の流通経路を発展させた。チャルカツィンゴはおそらく外に向かって支配域を広げているような共同体ではなかった。

チャルカツィンゴ自体、人口密度の低い、比較的小規模な集落だった。全盛期のカンテラ期で、40ha（このうち5haは公共空間）の範囲に140～400人ほどが住んでいたと考えられている（アマテ期は4～6ha、最大人口66人、バランカ期は13ha、130～325人；Prindiville and Grove 1987: 78–80; see Hirth 1987）。集落内に明確な階層化を示すデータはなく、埋葬データから遺跡中心部にある住居がエリート層のものであるという以外、住居のサイズも遺物の出土パターンも均質である（Prindiville and Grove 1987: 80）。また、中央広場のま

わりにはテラスが作られたが、一つのテラスにつき一つの住居が建てられていたようで、住居の周りは農地として使用されていた。集住化した後の時代の中央メキシコの都市とは様相が大きく異なり、住居が散在した中に儀礼空間が作られ、そこではおそらく農耕に深く関係した雨乞いの儀礼が祖先崇拜と結びつけられて行われていたのだろう。シャーマン＝統治者を中心に組織された「村」とも呼べる集落は、遠距離交易の拠点でもあり、黒曜石をはじめ緑の石や鉄鉱石などが搬入された。確かに、集落の中心部に居住していたエリート集団とそれ以外という大まかな階層化は存在したが、チャルカツィングの近隣に住む住民を越えて、政治経済的に社会を統合するという動きは見られない。

マクロ地域内における地政学的なポジション、そして、データはチャルカツィングに限られるが、集落内での限られた階層化の度合い、政治経済的統合の度合いを考慮すると、古典期マヤのような競合する同列政体という構造ではなく、シャーマン間のネットワークによって物質文化が広く共有されたものの、マクロ地域レベルでも地域レベルでも集落レベルでも、密度の低い社会関係によって成り立っており、相互交流の機会もあまり多かったとは言えないだろう。

シャーマン同士が緊密なネットワークによってモレロス・ゲレロ・マクロ地域は統合されていたが、シャーマンを含むエリート層と儀式を支えた人々との社会的差分化はそれほど進まなかった。黒曜石製石器を製作する専門の工人など、社会の分業化もある程度発展したが、集落の中心部近くに住む住民も農耕に従事していたことを考慮すると、後の時代に見られるような都市と田園地域という機能的分化も進まなかったようだ。現代の基準から判断すると、決して都市とは呼べない規模の集落であるが、中心部にはモニュメント建造物と儀礼を行う広場が設置され、後の時代の都市伝統に繋がる特徴も備えていた。そして、特筆すべきは、雨や豊穡を祈る儀礼が行われていた場所が、シャーマン＝統治者の住居の目の前だったということだ。農耕儀礼と祖先崇拜が密接に結びつき、社会を統合する一つのシンボルになっていたと考えられる。

3 モレロス・ゲレロ伝統の終焉

チャルカツィングをはじめとするモレロス・ゲレロ伝統はおそらく前700年頃に終焉を迎える。前述したとおり、モレロス・ゲレロ伝統と後の中央メキシコ都市伝統の間には時間的な断絶があり、新たな都市が勃

興したためにモレロス・ゲレロ伝統が衰退したとする説明は成立しない。シャーマン＝統治者の伝統は、マヤ南部でその後も継続し、形を変えながら古典期マヤの神聖王権に発展していくのとは対照的である。グローヴ (Grove 2000: 148) は、この時期の高地では雨量が減少し、新たに確立された集落の多くが水源の近くにあることに着目し、気候変化が大きく関係している可能性があるとした。しかしながら、チャルカツィング放棄後のアマツィナック谷の人口は減少しておらず、逆に増加した可能性もある (Hirth 1987)。セトルメントパターン研究からハースは、村落レベルの集落内の人口密度が増加した可能性を指摘している。人口の集住化は、減少した雨量に対して土地の生産性を高めるために必要な労働量 (例えば、用水路の建設) を確保した結果と考えられる。

ただし、形成期中期終わりから形成期後期にかけての土器編年がそれほど精緻化されていないため、これらの解釈については注意する必要がある。グローヴやハースらの研究では、チャルカツィングの放棄後すぐに形成期後期が始まるとされているが、本論で示唆したように、チャルカツィングの放棄は形成期中期の半ばだった可能性が高い。そうだとすれば、チャルカツィングの崩壊後から形成期後期の集落の間には、時期的な断絶があり (Grove 1987: 440–441)、アマツィナック谷の人口は実際には激減し、形成期後期になって回復したというシナリオも成り立つ。

気候変化に加えて、交易ルートの変化も遠因として考慮する必要があるかもしれない。モレロス・ゲレロ伝統の全盛期は、太平洋岸沿いの交易ルートが主要なものであったと思われる (Pye and Gutiérrez 2007)。実際、統治者に纏わるイデオロギーは南部マヤ太平洋岸の諸センターと共有されていた。形成期中期半ばを過ぎると (前800年～)、農民は中央メキシコ北部へと拡散していった。リチャード・レシュアらによると (Lesure et al. 2013)、モレロスなどの亜熱帯で発展した農耕技術を持った集団が、プエブラ・トラスカラ地域に拡散していったようだ。冷涼な高原には適さない技術のため、新たな農耕集落は持続可能ではなく短命だったことが示唆されている。灌漑を伴った持続可能な農耕技術が広まり根付くまでにはしばらくの時間がかかったが、農民が北部に拡散していき、メソアメリカの西と東を繋ぐ新たな交易ネットワークを作り上げていく中で、太平洋岸の南部ルートが衰退していったことも考えられる。ただし、新たな交易ネットワーク

と中央メキシコ都市伝統が絡まり合いながら発展していったと考えるならば、この新たなネットワークの形成をチャルカツィンゴが失墜した原因として考えるのは多少無理がある。

もう一つ考えられるのが、モレロス・ゲレロ伝統と密接な関係にあったメキシコ湾岸ラ・ベンタの盛衰である。ラ・ベンタの編年は錯綜しており、さらに試料の年代値は放射性炭素年代較正曲線のホールスタット・プラトーに位置しているため、正確な年代はいまのところ不明である。その全盛期は前900～400年とされているが (Drucker et al. 1959; Grove 1997)、チャルカツィンゴと同様、崩壊の年代は前400年よりずっと前の可能性もある。筆者が出版されている年代をOxCalで較正したところ、前700年頃に放棄されたとする解釈も成り立つ結果を得た⁵。しかし、もともとの測定値の標準偏差が300年と長いと、再測定する必要がある。ここでは、可能性の一つとして、モレロス・ゲレロ伝統の終焉とラ・ベンタの崩壊が関係している可能性があるという点だけ指摘しておく。

いずれにせよ、チャルカツィンゴならびにその周辺の集落を放棄した人々は元の場所に戻ることはなく、シャーマン＝統治者の伝統は潰えたようである。ただし、ナワル信仰自体はその後も続き、後古典期、植民地期にまで引き継がれていった (Gutiérrez and Pye 2010)。ナワリズムの実践と、統治者崇拝 (統治者の祖先崇拝) の結び付きが断たれたことになる。

VI 中央メキシコ都市伝統のはじまり

トラランカレカを始めとする新たなセンターで集住化の最初の波が訪れるのは前650年以降である。プエブラ・トラスカラ地域ではテショロック期 (前650～500年)、メキシコ盆地ではティコマン期 (前650～100年) に当たる。メキシコ盆地では、クイクイルコ、チマルワカン、トラパコヤ、プエブラ・トラスカラ地域では、トラランカレカ、ショチテカトル、アマルカン、コアパン、トティメワカンが発展する。多少規模は劣るが、トラスカラ州に位置するラ・ラグーナも含むことができる。これらのセンターの内、体系的な発掘調査が行われ報告されているのはトラパコヤ (Barba de Piña Chán 1956, 1980)、ショチテカトル (Serra

Puche and Lazcano Arce 2011; Serra Puche et al. 2004)、トラランカレカ (嘉幡・村上 2015; 嘉幡他 2014, 2017, 2021; Murakami et al. 2017; Murakami et al. 2018)、そしてラ・ラグーナ (Carballo 2016) のみで、あとは小規模な発掘あるいは不十分な報告から全体像がつかめていない。特にメキシコ盆地内のクイクイルコは、紀元後に起こったシトレ火山の噴火により溶岩に覆われており、大規模な発掘調査は困難になっている。また、これらのセンターでは形成期後期・終末期までに建造物の増改築が繰り返し行われているため、集住化が始まった頃の建築活動についてはあまりよく分かっていない。その中でも、ショチテカトルでは大規模な発掘調査が行われ、テショロック期の公共建造物が発掘されている (Serra Puche and Lazcano Arce 2011; Serra Puche et al. 2004)。以下では、データが比較的豊富な形成期後期・終末期の資料から、中央メキシコ都市伝統の特徴とその多様性について記述する。

1 中央メキシコ都市伝統の特徴と多様性

複数のセンターで共有されている特徴は大きく3つある (Carballo 2016)。まず、主要な建造物が東西軸上に建てられたことである。次に、モニュメント建造物が水に纏わるシンボリズムと深く関係していたことである。最後に、火あるいは火山に関連した儀礼が世帯レベルで発展したことである。以下では、比較的データがそろっている前者二つに焦点を当てて、遺跡間の共通性と多様性を見ていきたい。

ショチテカトルでは、テショロック期に丘陵部の頂上に広場が建設され、その東に主要な基壇が建てられた。広場の南にも基壇が建てられ、広場を挟んで西側にはおそらく火山を模した円錐状の構造物が建てられた。この祭祀・行政の中心地区は次のテソキパン期に大幅に建て替えられ、それぞれの建造物は一回り以上拡大された。トティメワカンは現代の都市の拡大によりほぼ破壊されてしまったが、五基のピラミッドが現在でも残っている。これらのピラミッドのうち、最大規模の二基のピラミッドは南北に並んで建てられたが、階段の位置から判断すると両者ともに西を向いている。おそらくピラミッドの西側には大広場があったと考えられる。中規模の都市ラ・ラグーナも同様に、大広場の東側に主要ピラミッドが建てられた。ショチ

⁵ 猪俣らも出版されている年代を再較正したが、ラ・ベンタの全盛期を前800～400年としている (Inomata et al. 2013: 469)。

テカトル同様、大広場の南には低い基壇が建てられた。ラ・ラグーナでは、他の遺跡では見られない球技場が大広場の西に建てられた。メキシコ盆地のクイクイルコも、遺跡の東端に巨大な円形ピラミッドが建てられている。円形ピラミッドの西側の様子はよく分かっていないが、テオティワカンで見られるような大通りがあったと推測する研究者もいる。トラランカレカも例外ではなく、主要建造物は東西軸上に建てられた。ただし、他のセンターと異なり、主要ピラミッドと大広場という誰が見ても明らかな中心地がトラランカレカでははっきりしない。ピラミッドの高さで言うと、セロ・グランデ・ピラミッドが最も高いが、その西に位置する広場はあまり大きくはない。広場の大きさで言うと、建造物Bとその西に位置する大広場、グループA、そして南の大基壇複合がいずれも他遺跡の中心地に匹敵する、あるいはより大きな複合である。やはりこれらの建築複合も、広場の東側に基壇が建てられた。これらの内、建造物Bは前方後方墳のような形をしており、トティメワカンの基壇と似ている。

一方で、東西の基軸と広場（あるいは大通り）の東側に建てられるピラミッドという共通項以外では、かなりのバリエーションが伺える。中でも、トラランカレカの複数の中心がある空間組織は特異であるが、それぞれの建造物の年代はまだよく分かっていないため、長年の建築活動が蓄積していった結果なのか、すべての建造物群が同時代に建てられたのか、今後の調査で検証していく予定である。一つの可能性としては、都市化の初期（テショロック期）には、他の遺跡と同じように一つの中心部があり、都市が拡大していく中で他の建築複合が建てられていったことが考えられる。また、例外も存在する。トラパコヤでは基壇建造物が単体で発掘されているだけだが（Barba de Piña Chán 1956, 1980）、基壇は丘の斜面上に作られ正面階段は北東を向いている。当時のトラパコヤが位置する丘はおそらくチャルコ湖に浮かぶ島で、沿岸部を向いていたのであろう。

これらのセンターの主要ピラミッドは、いずれも水のシンボリズムと深く関係している。ショチテカトルの主要ピラミッドの中段部には、石製の水を貯める鉢が設置されている。トティメワカンの北側のピラミッド中段にも石製の水溜場が設置されており、カエルの浅浮彫が施されている。ラ・ラグーナのピラミッドでは、頂上に粘土製の窪みがしつらえてあり、すぐ近くには黒曜石製ナイフやエキセントリック（人物や動物

など特別の形に加工した石器）が埋納されていた。盗掘された「嵐の神の壺」はもともとこの主要ピラミッドに埋納されていたもののようだ（Carballo 2016: 193）。クイクイルコの円形ピラミッドには水を貯める施設は見つかっていないが、ピラミッドから発掘された石碑には、水滴を含む水のシンボリズムの浅浮彫が施されていた。トラランカレカではまだ主要建造物の中段あるいは上段の発掘が進んでいないため、同様の施設があったのかははっきりしない。しかしながら、建造物Bとトティメワカンのピラミッドの形状の類似性から、建造物Bの中段に同様の施設があった可能性はある。トラパコヤでは、主要基壇に埋納された土器に「嵐の神の壺」あるいはその祖型が含まれ（Carballo 2016: 190）、基壇と水の関係が見て取れる。

トラランカレカで特筆すべきは、水のシンボリズムが主要ピラミッド以外のコンテクストから明らかになっていることである。一つは、主要建造物群が建てられた丘自体であり、もう一つが、中規模の祭祀施設である。丘の東端の裾野には自然の泉があり、その傍らには石彫が建てられた（おそらく嵐の神）。発掘調査から、用水路が作られていたことが分かっており、おそらく水を貯める施設も併設されていた。年代測定から、これらの施設は形成期終末期（後100年頃）に建てられたことが分かっている。しかし、形成期中期の居住域がこの湧水から同心円状に広がっていたことに鑑みると、湧水は単なる水源ではなく、共同体のメンバーが集まる儀礼の場であった可能性が高い。

後古典期の中央メキシコでは、都市あるいは都市国家のことをアルテペトル（*altepetl*）と呼んでいた。ナワトル語で「水の山」の意味である。水の山の上に都市を築いたトラランカレカや他の形成期のセンター（アマルカン、ショチテカトル）が、この「水の山」としての都市のアーキタイプ（祖型）となったことは想像に難くない（嘉幡他 2017）。

トラランカレカでは建造物C5-C6とトレス・マリアス建築複合の中規模建造物を発掘し、両方から饗宴と関係したゴミ捨て場が見つかったことから、儀礼を伴う饗宴に使用された施設として解釈した（村上他 2019）。両者に共通していたのは、食事を盛り付ける器種が多数を占めていたにも関わらず、動物骨が共伴していなかったことである。さらに、「嵐の神の壺」と呼ばれる儀礼に使用されたと考えられている壺の破片も出土した。トレス・マリアス建築複合では、盃のような小さな杯も多数出土した。後古典期のメキシコ

盆地における儀礼実践との比較から、雨乞いや豊穡の儀礼が行われ酒（プルケ）が消費されたと考えられる（村上他 2019）。後古典期では、プルケの神のための饗宴は、雨の神・山の神のものと同じ月に開催されていた。また、「水のタマル」と呼ばれる肉の入っていないタマル（トウモロコシをすりつぶして蒸したもの）が食されていた。

総じて、水の山のシンボリズムは単体の建造物から都市全体まで異なるスケールで体现されており、各都市の住民を統合する重要な原理の一つであるとともに、形成期中央メキシコの複数の都市を結び付けるイデオロギー的基盤であった。この共有されたイデオロギーはしかし、それぞれの都市で異なる表現・方法で実践された。

2 「水の山」の建設と都市の起源

山と雨、水の関わりは古くから存在し、形成期後半になって特に新たに加わったものではない。チャルカツィングでも、中心部の南に位置する山には水や雨、雲などの図像が描かれた石彫レリーフが設置されていた。前述したとおり、そこにはジャガーに変身した統治者が人を生贄にすることで恵みの雨が降る光景が描かれていた。また、洞窟内にいる統治者から風が吹き、雨雲がもたらされる場面もある。このように、山と雨（水）、あるいは水の山の信仰はおそらく古くから存在するものだろう。しかし、モレロス・ゲレロ伝統では、自然の山に聖域を造りはしたが、「水の山」自体を作り出すことはしなかった。

人々が集まりだしたトラテンパ期（前800～650年）のトラランカレカ（そして後に都市へと発展していく他の集落）も同様だったと考えられる。トラランカレカでは水の湧く山の上に円形のウッドヘンジのようなものが造られ、雨や豊穡に関係した儀礼が行われていたのであろう。あるいはシャーマンが秘儀を行う聖域だった可能性もある。しかしその後、人工の「水の山」が造られるようになっていく。トラランカレカではまだ直接的な証拠はないが、トラランカレカから見える距離にあるショチテカトルでは、テショロック期（前650～500年）に基壇と広場の複合が丘の頂上に造られた。この開かれた空間では、おそらく多くの人々が参加できる儀礼が行われたのであろう。しかし、モレロス・ゲレロ伝統のように、儀礼の執行者もしくは共同体のリーダーの姿が公共の場で称え祀られることはなかった（この差が何に起因するのかについては次章

で議論する）。そして、人工の「水の山」はさらに人々を惹きつけ、集落は拡大し、「水の山」自体も拡大していった（嘉幡他 2019）。インゴルドの「住むパースペクティブ」に引き寄せて考えると、労働力や原材料や意味を含め、「水の山」を建てるという行為自体が都市に住まうという共同性／協働性を体现しており、物理的な世界と世界観という区分なしの「世界」を造り上げる行為でもあった。

VII 社会統合と差異化の狭間で

しかし、宗教イデオロギーの存在によってのみ人々の集住化を説明できるだろうか。モレロス・ゲレロ伝統でも共有された宗教イデオロギーが存在したが、中央メキシコで見られるような集住化には繋がらなかった。この問題を解くカギの一つとなるのが、集落間の関係である。モレロス・ゲレロ伝統では、主要センターはそれぞれかなり離れており（50～100km）、その一方で建築様式や石彫様式がかなり類似していた。前述したとおり、これはシャーマン＝統治者の相互交流によって可能となったと解釈でき、一方でエリート層以外の集団はそれほど密に交流していなかったと考えられる。新たな中央メキシコ都市伝統では、集落間の距離はかなり近く（20～30km）、相対的により頻繁な交流関係にあり、共有する資源もあったと思われる。しかし、距離と反比例するように、建築様式や石彫様式は集落ごとにより異なる。ショチテカトルに至っては、マヤ南部に特徴的な「ポットベリー」と呼ばれる石像すら存在する（Delgadillo Torres and Santana Sandoval 1989）。つまり、「水の山」を中心とした宗教イデオロギーはある程度共有されていたが、各集落は他の集落とは異なる建造物、石彫を造ることで独自のアイデンティティを追求していたと考えられる。直接対立し戦争をしていたという証拠はないが、少なくとも建築や石彫の洗練度、黒曜石などの資源の獲得、他地域との交易関係の確立などで競合関係にあった。このような集落間の競合が、各集落内での社会統合を促し、独自のアイデンティティが醸成され、儀礼が洗練されていった。そして、それが人々を惹きつけ、さらなる人口増加に繋がっていったと考えられないだろうか。このような競合と統合のプロセスは、メキシコ盆地ならびにプエブラ・トラスカラ地域それぞれで独立して進行していた訳ではなく、二つの地域を合わせたマクロ地域レベルで展開していた。つまり、マクロ地域レベ

ルでの競合関係と集落内での社会統合の度合いは相互に規定し合う循環的な関係にあったと言える。

前700年頃、統治者を中心にした社会が失墜していき、水の山のシンボリズムを中心にした社会が環境的にはより厳しい中央メキシコで再編されていった。統治者中心の政治システムが古典期まで、そしてそれ以後も継続したメソアメリカ東部（マヤ地域）とは対照的である（e.g., Love and Kaplan [eds.] 2011）。もちろん、中央メキシコでも権力者を中心に据えた社会がテオティワカンの時代（後200年以降）に再びやってくる（Sugiyama 2005）。しかし、権力構造ではなく、いわゆる共同体のあり方がメソアメリカの西と東では異なるように見える。その違いは、例えば都市部の人口密度の違いなどにも表れるし（Fletcher 2012）、住居の作り方にも表出している（Murakami 2019）。それはやはり、人々がどのようにに関わり合いながら暮らしてきたのか、長い歴史の中で培われてきたものであろう。形成期中期の終わりから後期にかけて、雨量が減少したことは前に述べた。なぜ雨量がより豊富なモレロス・ゲレロ・マクロ地域ではなく、そもそも冷涼で乾燥した中央メキシコで都市が発展したのか。雨量が減少した時期に土地の生産性を高める手段として灌漑技術を発展させたことは指摘されている（Fowler 1987; Grove 2000）。しかし、灌漑技術は多くの人々の共同作業がなければ成り立たない。つまり、大規模な協働（cooperation）のシステムが早くから醸成されていき、それが基層となり集住化を可能にし、さらに促進していったと考えられないだろうか⁶。ウバイド期のメソポタミア南部の一部では、灌漑農耕と神殿建築が同時に出現し（Stein 2010, 2020）、それがウルク期の都市国家へと繋がっていったのと類似する。

これまでの研究で知られている限り、ほぼすべての初期文明社会はある地域あるいはマクロ地域に複数存在する集落間の相互交流の中で発展してきた（Wright 2005）。都市形成という現象も、この多中心的（polycentric）な文脈で理解されなければならない。つまり、ある集落を取り上げて、それが都市なのかどうかを議論するのではなく、地域・マクロ地域全体でいかなる社会変化のプロセスを辿っているのか検証する必要がある。アメリカ東部のホープウェル文化を研究したジョゼフ・キャルドウェル（Caldwell 1964）は

ゆるやかに統合されたマクロ地域文化を相互交流圏（interaction sphere）と呼んだ。レンフルーの同列政体とは少しニュアンスが異なり、異なる社会・文化間での物質文化の類似性に焦点を当てた概念である。この相互交流のネットワークを通して、物質文化や文化的実践が広く共有された。しかし、何が共有されたのか、どのような理由で共有されたのかは同じ交流圏の中でも異なることもある。同じくホープウェル文化を研究したクリストファー・カー（Carr 2005）やメソポタミアのウバイド期を検証したギル・スタイン（Stein 2010）らは、共有された交流圏の中に立ち現れるローカル（地域性）に注目した。つまり、本論で言うところの統合と差異化である。これは現代のグローバリゼーションの文脈で立ち上がるローカルを表わしたグローカライゼーションという概念とも通底するものである。そして、彼らは単に統合と差異化という抽象的な概念で説明するのではなく、その内実に注目した。何がどのような理由で共有されたのか、そして何がどのような理由で共有されずに独自性を保ったのか。スタインはアイデンティティをキーワードに説明を試み、カーはそれぞれのローカルの特殊な状況が、巡礼や儀礼アイテムの交易などのネットワークを生み出したと説明した。本論の文脈で言えば、キャルドウェルがもともと主張していたような宗教的イデオロギーが広く共有されていたが、儀礼アイテムや儀礼の場についてはローカルが強調された。マクロ地域内での統合と差異化という矛盾するプロセスの循環的あるいは弁証法的な関係が、都市化を推し進めた大きな力になったと考えられる。中央メキシコと類似したプロセスがメソポタミア南部や他の地域でも起きていたのであろう。

この差異化というプロセスがより直接的な競合に向かった時、戦闘の社会的重要性が増し、その意図せざる結果として、支配・被支配という関係性が生み出されたと考えられる。つまり、王制という制度も、ある集落で自生的に発生するものではなく、地域・マクロ地域内での統合と差異化のプロセスの中で生まれたと考えることができる。南アジアのインダス文明では、4つの都市がほぼ同間隔で発展した。しかし、本論で述べたモレロス・ゲレロ伝統以上に、都市間の距離が遠く（500km以上）、資源を巡って競合するような関

⁶ 灌漑農耕が専制主義を可能にしたと主張したウィットフォードと異なり、中央メキシコのデータはその逆を示唆する。つまり、灌漑農耕により統治者に権力が集中しない共同体が発展した可能性がある。

係ではなかった。物質文化や交易の実践など、ゆるやかに共有された相互交流圏であったが、競合の方向へは進まず、それぞれの都市内での階層制も発展しなかった（Green 2021）。「国家なき都市」と言われる由縁である（Possehl 1998）。

インダスのような、いわゆる文明圏にまで範囲を広げた議論は古くから存在する。ロバート・ブレイドウッドとゴードン・ウィリー（Braidwood and Willey 1962）は、多様な地域文化の存在が文明の発展には不可欠だったとした。それらの異なる地域文化を繋いだのが、オルメカ様式やチャビン様式のように広く共有された宗教イデオロギーだとされた。キャルドウェルも同様に、異なる地域伝統を繋げる宗教を中心に据えた相互交流圏の存在がイノベーションに繋がり、文明あるいは大伝統が発展したと考えた（Caldwell 1964: 140-141）。キャルドウェルはまた、「文明」と呼ばれているか否かに関係なく（例えばホープウェルは通常「文明」とは呼ばれていない）、同じプロセスがあらゆる場所に存在することを指摘した。これら60年代の議論は本論を含めたその後の研究の基礎となるが、分析ユニットが大きすぎるため、どうしても議論が抽象的にならざるを得なかった。一方で、近年はデータの精度が上がるのに比例して、より近視的な議論が可能になった。これらの両端の規模の分析ユニット（文明圏全体とローカル）を繋ぐ、議論が抽象的になりすぎない程度の中位の分析レベルが必要なのは言うまでもない。本論ではこの中位のレベルをマクロ地域として設定した。この中位のレベルは、モデルとデータを繋ぐのに不可欠だと筆者は考える。今後は、このマクロ地域の構造と地域レベル・集落レベルの社会関係がどのように絡まり合っていたのか、より詳細に検証していく必要がある。例えば、本論ではデータの欠如からあまり議論できなかった地域レベルの社会変化も、マクロ地域の構造の形成に重要な役割を果たした可能性がある⁷。都市の起源は社会統合と差異化の狭間にあるとする本論の主張は、こういったスケールの異なる複数の分析ユニットから検証することで意味を成す。

謝辞

「トラランカレカ考古学プロジェクト」は、嘉幡・村上を共同団長として、松下国際研究基金（平成24年）、米国ウェ

ナー・グレン財団（2014-15年；Wenner-Gren Foundation; Gr. 8852）、米国立科学研究基金（2015-2019年；National Science Foundation; BCS-1524214）、チュレーン大学のラテンアメリカ研究センター（2014-2023年；Stone Center for Latin American Studies）、教養学部（2014-2023年；School of Liberal Arts）、ラーシー基金（2014-2023年；Lurcy Grant）、キャロル・ラヴィン・バーニック基金（2018年；Carol Lavin Bernick Faculty Grant）、人類学科からの助成（2014-2023年；以上、研究代表者：村上達也）、さらにJSPS 科研費24682005（平成24-26年度・若手研究（A））「古代メソアメリカにおける初期国家の形成プロセス：トラランカレカ考古学調査」（研究代表者：嘉幡茂）、JSPS 科研費26101003（平成26-30年度・新学術領域研究）「古代アメリカの比較文明論」（研究代表者：青山和夫；分担研究者：嘉幡茂、福原弘識）、JSPS 科研費19H01347（令和1-4年度・基盤研究（B））「古代メキシコの都市形成史：世界の知的体系化と物質化」（研究代表者：嘉幡茂）を基に実施されている。

本稿の執筆にあたっては、渡部森哉氏、八木宏明氏、嘉幡茂氏から貴重なコメントを頂いた。ここに記して感謝したい。本稿の元となった発表は南山大学人類学研究所の計らいで可能となった。シンポジウムを企画してくださった渡部氏をはじめ、人類学研究所の皆様に感謝申し上げたい。

参考文献

（日本語文献）

出穂 雅実

- 2021 「氷期に遡る最初のアメリカ人の出現とその拡散」『メソアメリカ文明ゼミナール』伊藤（監修）嘉幡・村上（編）、pp. 3-32、勉誠出版。

嘉幡 茂、村上 達也

- 2015 「古代メソアメリカ文明における古代国家の形成史復元——「トラランカレカ考古学プロジェクト」の目的と調査動向」『古代文化』67(3): 99-109。

嘉幡 茂、フリエタ・M・ロペス・J、荒木 昂大、村上達也

- 2019 「水の神と火の神——割って入った神の出現による社会の変化」『古代アメリカ』22: 33-44。

嘉幡 茂、村上 達也、フリエタ・M・ロペス・J

- 2017 「自然景観を取り込んだ古代都市——トラランカレカ」『古代文化』68: 519-527。

- 2021 「考古フォーカス——メキシコ合衆国プエブラ州トラランカレカ遺跡」『考古学研究』68(4): 101-103。

嘉幡 茂、村上 達也、フリエタ・M・ロペス・J、ホセ・ファン・チャベス・V、福原 弘識

- 2014 「メキシコ中央高原における初期国家形成の解明

⁷ 例えば、形成期終末期のメキシコ盆地では複数の都市がクイクイルコの支配下に入り、プエブラ・トラスカラ地域ではトラランカレカが勢力を伸ばし、両都市が戦闘を伴う競合関係にあったと考えることもできる。

- にむけて——トラランカレカ考古学プロジェクト』『古代アメリカ』17: 53–71。
- 古手川 博一・黒崎 充
2021 「メキシコ湾岸文化——南部地方と中部地方の古代文化」『メソアメリカ文明ゼミナール』伊藤（監修）嘉幡・村上（編）、pp. 69–92、勉誠出版。
- 出口 顕
2017 「建てることと住むこと——住居の物質性の研究のために」『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』古谷・関・佐々木（編）、pp. 183–204、同成社。
- 藤本 強
2007 『都市と都城』同成社。
- 村上 達也、嘉幡 茂
2021 「メキシコ中央高原文化——テオティワカンからトルテカまで」『メソアメリカ文明ゼミナール』伊藤（監修）嘉幡・村上（編）、pp. 103–133、勉誠出版。
- 村上 達也、福原 弘識、ディエゴ・マタダマス・ゴモラ、嘉幡 茂
2019 「酒と水と嵐の神の壺——形成期終末期における都市の発展と社会統合」『古代アメリカ』22: 45–58。
- （欧文文献）
- Barba de Piña Chán, Beatriz
1956 *Tlapacoya: Un sitio preclásico de transición*. Acta Anthropologica Epoca 2, Vol. I, No. 1. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
1980 *Tlapacoya: los principios de la teocracia en la Cuenca de México*. Biblioteca Enciclopedia del Estado de México.
- Bettencourt, Luís M. A.
2013 The Origins of Scaling in Cities. *Science* 340(6139): 1438–1441.
- Blanton, Richard E.
1976 Anthropological Studies of Cities. *Annual Review of Anthropology* 45: 145–151.
- Braidwood, Robert J. and Gordon R. Willey
1962 Conclusions and Afterthoughts. In *Courses Toward Urban Life*. R. J. Braidwood and G. R. Willey (eds.), pp. 330–359. Viking Fund Publications in Anthropology, No. 32.
- Bronk Ramsey, Christopher
2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon Dates. *Radiocarbon* 51(1): 337–360.
- Bronk Ramsey, Christopher
1995 Radiocarbon Calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon* 37(2): 425–430.
- Caldwell, Joseph R.
1964 Interaction Spheres in Prehistory. *Illinois State Museum Scientific Papers* XII(6): 133–156.
- Canto Aguilar, Giselle and Victor M. Castro Mendoza
2010 Zacatlatla in the Framework of Olmec Mesoamerica. In *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica's Preclassic Transition*. J. Guernsey, J. E. Clark and B. Arroyo (eds.), pp. 77–95. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Canto Aguilar, Giselle and Jaime Reséndiz Machón
2007 Las tradiciones cerámicas de Zacatlatla durante el Preclásico. *THULE: Rev. ital. di studi americanistici* 22/23–24/25: 219–260.
- Carballo, David M.
2016 *Urbanization and Religion in Ancient Central Mexico*. Oxford University Press.
- Carr, Christopher
2005 Rethinking Interregional Hopewellian ‘Interaction’. In *Gathering Hopewell: Society, Ritual, and Ritual Interaction*. C. Carr and D. T. Case (eds.), pp. 575–623. Kluwer Academics/Plenum Publishers.
- Childe, V. Gordon
1950 The Urban Revolution. *Town Planning Review* 21(1): 3–17.
- Cowgill, George L.
2004 Origins and Development of Urbanism: Archaeological Perspectives. *Annual Review of Anthropology* 33: 525–549.
2015 *Ancient Teotihuacan: Early Urbanism in Central Mexico*. Cambridge University Press.
- Cyphers Guillen, Ann and David C. Grove
1987 Chronology and Cultural Phases at Chalcatzingo. In *Ancient Chalcatzingo*. D. C. Grove (ed.), pp. 56–62. University of Texas Press.
- Delgadillo Torres, Rosalba and Andrés Santana Sandoval
1989 Dos esculturas olmecoides en Tlaxcala. *Arqueología* 1: 53–60.
- Drucker, Philip, Robert F. Heizer and Robert J. Squier
1959 *Excavations at La Venta, Tabasco, 1955*. Bureau of American Ethnology Bulletin 170. Smithsonian Institution.
- Duffy, Paul R., William A. Parkinson, Attila Gyucha and Richard W. Yerkes
2013 Coming Together, Falling Apart: A Multiscalar Approach to Prehistoric Aggregation and Interaction on the Great Hungarian Plain. In *From Prehistoric Villages to Cities: Settlement Aggregation and Community Transformation*. J. Birch (ed.), pp. 44–62. Routledge.
- Evans, Susan Toby
2008 *Ancient Mexico and Central America: Archaeology and Culture History*. Second Edition. Thames and Hudson.

- Ferguson, Yale H. and Richard W. Mansbach
1996 *Politics: Authority, Identities, and Change*. University of South Carolina Press.
- Fletcher, Roland J.
2012 Low-Density, Agrarian-Based Urbanism: Scale, Power, and Ecology. In *The Comparative Archaeology of Complex Societies*. M. E. Smith (ed.), pp. 285–320. Cambridge University Press.
- Fowler, Melvin L.
1987 Early Water Management at Amalucan, State of Puebla, Mexico. *National Geographic Research* 3(1): 52–68.
- Graeber, David and David Wengrow
2015 Farewell to the ‘Childhood of Man’: Ritual, Seasonality, and the Origins of Inequality. *Journal of the Royal Anthropological Institute (N.S.)* 21: 597–619.
- Green, Adam S.
2021 Killing the Priest-King: Addressing Egalitarianism in the Indus Civilization. *Journal of Archaeological Research* 29: 153–202.
- Grove, David C. (editor)
1987 *Ancient Chalcatzingo*. University of Texas Press.
- Grove, David C.
1987 Chalcatzingo in a Broader Perspective. In *Ancient Chalcatzingo*. D. C. Grove (ed.), pp. 434–442. University of Texas Press.
1989 Chalcatzingo and Its Olmec Connection. In *Regional Perspective on the Olmec*. R. J. Sharer and D. C. Grove (eds.), pp. 122–147. Cambridge University Press.
1997 Olmec Archaeology: A Half Century of Research and Its Accomplishments. *Journal of World Prehistory* 11(1): 51–101.
2000 The Preclassic Societies of the Central Highlands of Mesoamerica. In *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas. Volume II: Mesoamerica, Part I*. R. E. W. Adams and M. J. Macleod (eds.), pp. 122–155. Cambridge University Press.
2016 Preclassic Central Mexico: The Uncertain Pathway from Tlatilco to Teotihuacan. In *The Origins of Maya States*. L. P. Traxler and R. J. Sharer (eds.), pp. 59–82. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- Grove, David C. and Jorge Angulo V.
1987 A Catalog and Description of Chalcatzingo’s Monuments. In *Ancient Chalcatzingo*. D. C. Grove (ed.), pp. 114–131. University of Texas Press.
- Gutiérrez, Gerardo and Mary E. Pye
2010 Iconography of the Nahual: Human-Animal Transformations in Preclassic Guerrero and Morelos. In *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica’s Preclassic Transition*. J. Guernsey, J. E. Clark and B. Arroyo (eds.), pp. 27–54. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Hirth, Kenneth G.
1987 Formative Period Settlement Patterns in the Río Amatzinac Valley. In *Ancient Chalcatzingo*. D. C. Grove (ed.), pp. 343–367. University of Texas Press.
- Ingold, Tim
2000 *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. Routledge.
- Inomata, Takeshi and Lucia Henderson
2016 Time Tested: Re-Thinking Chronology and Sculptural Traditions in Preclassic Southern Mesoamerica. *Antiquity* 90(350): 456–471.
- Inomata, Takeshi, Raúl Ortiz, Bárbara Arroyo and Eugenia J. Robinson
2014 Chronological Revision of Preclassic Kaminaljuyú, Guatemala: Implications for Social Processes in the Southern Maya Area. *Latin American Antiquity* 25(4): 377–408.
- Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, V. Castillo, and H. Yonenobu
2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340(6131): 467–471.
- Jacobs, Jane
1961 *The Death and Life of Great American Cities*. Random House.
- Jennings, Justin
2016 *Killing Civilization: A Reassessment of Early Urbanism and Its Consequences*. University of New Mexico Press.
- Jennings, Justin and Timothy Earle
2016 Urbanization, State Formation, and Cooperation: A Reappraisal. *Current Anthropology* 57: 474–493.
- Joyce, Rosemary A.
1999 Social Dimensions of Pre-Classic Burials. In *Social Patterns in Pre-Classic Mesoamerica*. D. C. Grove and R. A. Joyce (eds.), pp. 15–47. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Lesure, Richard G., Aleksander Borejsza, Jennifer Carballo, Charles Frederick, Virginia Popper and Thomas A. Wake
2006 Chronology, Subsistence, and the Earliest Formative of Central Tlaxcala, Mexico. *Latin American Antiquity* 17(4): 474–492.
- Lesure, Richard G., Jennifer Carballo, David M. Carballo, Aleksander Borejsza and Isabel Rodríguez López
2014 A Formative Chronology for Central Tlaxcala. In *Formative Lifeways in Central Tlaxcala: Volume 1: Excavations, Ceramics, and Chronology*. R. G. Lesure (ed.), pp. 315–362. Cotsen Institute of Archaeology Press.

- Lesure, Richard G., Thomas A. Wake, Aleksander Borejsza, Jennifer Carballo, David M. Carballo, Isabel Rodríguez López and Mauro de Ángeles Guzmán
2013 Swidden Agriculture, Village Longevity, and Social Relations in Formative Central Tlaxcala: Towards an Understanding of Macoregional Structure. *Journal of Anthropological Anthropology* 32: 224–241.
- Love, Michael and Jonathan Kaplan (editors)
2011 *The Southern Maya in the Late Preclassic: The Rise and Fall of an Early Mesoamerican Civilization*. University Press of Colorado.
- MacNeish, Richard S. and Antoinette Nelken-Terner
1983 The Preceramic of Mesoamerica. *Journal of Field Archaeology* 10(1): 71–84.
- Marcus, Joyce and Kent V. Flannery
1996 *Zapotec Civilization: How Urban Society Evolved in Mexico's Oaxaca Valley*. Thames and Hudson.
- Martínez Donjuán, Guadalupe
1985 El sitio olmeca de Teopantecuanitlán en Guerrero. *Anales de Antropología* 22: 215–226.
1986 Teopantecuanitlán. In *Arqueología y Etnohistoria del Estado de Guerrero*, pp. 55–82. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
2010 Sculpture from Teopantecuanitlan, Guerrero. In *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica's Preclassic Transition*. J. Guernsey, J. E. Clark and B. Arroyo (eds.), pp. 55–76. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Millon, René
1993 The Place Where Time Began: An Archaeologist's Interpretation of What Happened in Teotihuacan History. In *Teotihuacan: Art from the City of the Gods*. K. Berrin and E. Pasztory (eds.), pp. 17–43. Thames and Hudson and the Fine Arts Museums of San Francisco.
- Mumford, Lewis
1961 *The City in History: Its Origins, Its Transformations, Its Prospects*. Harcourt, Brace and World.
- Murakami, Tatsuya
2019 Towards a Multiscalar Comparative Approach to Power Relations: Political Dimensions of Urban Construction at Teotihuacan and Copan. In *Architectural Energetics in Archaeology: Analytical Expansions and Global Explorations*. L. McCurdy and E. M. Abrams (eds.), pp. 265–288. Routledge.
2022 Refining the Middle Formative Chronology in Central Mexico: Implications for the Origins of the Central Mexican Urban Tradition. In *Identities, Experience, and Change in Early Mexican Villages*. C. E. Santasilia, G. D. Hepp and R. A. Diehl (eds.), pp. 224–257. University Press of Florida.
- Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata, Julieta M. López J. and José Juan Chávez V.
2017 Development of an Early City in Central Mexico: the Tlalancaleca Archaeological Project. *Antiquity* 91: 455–473.
- Murakami, Tatsuya, Alexander Jurado and Shigeru Kabata
2025 Dating the Beginning of Urbanization in Central Mexico: A High-Resolution Chronology of the Middle Formative Period at Tlalancaleca. *Radiocarbon* 67: 88–110.
- Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata, Julieta M. López J. and Paige Phillips
2018 A Multi-Method Approach to Reconstructing Occupational History and Activity Areas: A Case Study at the Formative Site of Tlalancaleca, Central Mexico. *Journal of Field Archaeology* 43(8): 634–654.
- Niederberger, Christine
1976 *Zohapilco: cinco milenios de ocupacion humana en un sitio lacustre de la Cuenca de Mexico*. Colección Científica, Arqueología 30. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
1987 *Paléopaysages et Archéologie Pre-urbaine du Bassin de Mexico*. CEMCA Colección Études Mésoaméricaines. Centre d'Études Mexicaines et Centraméricaines.
2000 Ranked Societies, Iconographic Complexity, and Economic Wealth in the Basin of Mexico toward 1200 BC. In *Olmec Art and Archaeology in Mesoamerica*. J. E. Clark and M. E. Pye (eds.), pp. 169–188. National Gallery of Art.
- Ochoa Castillo, Patricia
2022 Beyond Contortionists: Archaeological Indicators of Ritual Activities at Tlatilco. In *Identities, Experience, and Change in Early Mexican Villages*. C. E. Santasilia, G. D. Hepp and R. A. Diehl (eds.), pp. 129–157. University of Florida Press.
- Ortman, Scott G., Andrew H. F. Cabaniss, Jennie O. Sturm and Luís M. A. Bettencourt
2015 Settlement scaling and increasing returns in an ancient society. *Science Advances* 2015(1): e1400066.
- Ortman, Scott G., José Lobo and Michael E. Smith
2020 Cities: Complexity, Theory and History. *PLoS ONE* 15(12): e0243621.
- Parsons, Jeffrey R.
1974 The Development of a Prehistoric Complex Society: a Regional Perspective from the Valley of Mexico. *Journal of Field Archaeology* 1: 81–108.
- Possehl, Gregory L.
1998 Sociocultural Complexity Without the State: The Indus Civilization. In *Archaic States*. G. M. Feinman and J. Marcus (eds.), pp. 261–291. School of American Re-

- search Press.
- Prindiville, Mary and David C. Grove
- 1987 The Settlement and Its Architecture. In *Ancient Chalcatzingo*. D. C. Grove (ed.), pp. 63–81. University of Texas Press.
- Pye, Mary E. and Gerardo Gutiérrez
- 2007 The Pacific Coast Trade Route of Mesoamerica: Iconographic Connections between Guatemala and Guerrero. In *Archaeology, Art, and Ethnogenesis in Mesoamerican Prehistory: Papers in Honor of Gareth W. Lowe*. L. S. Lowe and M. E. Pye (eds.), pp. 229–246. vol. Papers of the New World Archaeological Foundation. 68 vols. New World Archaeological Foundation, Brigham Young University.
- Reilly, F. Kent, III
- 1995 Art, Ritual, and Rulership in the Olmec World. In *The Olmec World: Ritual and Rulership*, pp. 27–45. Art Museum, Princeton University.
- Renfrew, Colin and John F. Cherry (editors)
- 1986 *Peer Polity Interaction and Socio-Political Change*. Cambridge University Press.
- Rosenau, James N.
- 1990 *Turbulence in World Politics: A Theory of Change and Continuity*. Princeton University Press.
- Rosenswig, Robert M.
- 2010 *The Beginnings of Mesoamerican Civilization: Inter-Regional Interaction and the Olmec*. Cambridge University Press.
- Sahlins, Marshall D. and Elman R. Service
- 1960 *Evolution and Culture*. University of Michigan Press.
- Sanders, William T.
- 1965 *The Cultural Ecology of the Teotihuacan Valley*. Department of Sociology and Anthropology, Pennsylvania State University.
- Santasilia, Catharina E.
- 2022 Tlatilco: The People of the Lake. In *Identities, Experience, and Change in Early Mexican Villages*. C. E. Santasilia, G. D. Hepp and R. A. Diehl (eds.), pp. 194–223. University Press of Florida.
- Saunders, Peter
- 1985 Space, the City and Urban Sociology. In *Social Relations and Spatial Structures*. D. Gregory and J. Urry (eds.), pp. 67–89. Palgrave.
- Sennett, Richard
- 2018 *Building and Dwelling: Ethics for the City*. Farrar, Straus and Giroux.
- Serra Puche, M. C. and J. C. Lazcano Arce
- 2011 *Vida cotidiana Xochitecatl-Cacaxtla: días, años, milenios*. Universidad Nacional Autónoma de México.
- Serra Puche, M. C., J. C. Lazcano Arce and M. De La Torre Mendoza
- 2004 *Cerámica de Xochitecatl*. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Service, Elman R.
- 1975 *Origins of the State and Civilization*. Norton.
- Smith, Michael E.
- 2009 V. Gordon Childe and the Urban Revolution: A Historical Perspective on a Revolution in Urban Studies. *The Town Planning Review* 80(1): 3–29.
- 2019 Energized Crowding and the Generative Role of Settlement Aggregation and Urbanization. In *Coming Together: Comparative Approaches to Population Aggregation and Early Urbanization*. A. Gyucha (ed.), pp. 37–58. State University of New York Press.
- 2020 Definitions and Comparisons in Urban Archaeology. *Journal of Urban Archaeology* 1: 15–30.
- Stark, Barbara L.
- 1981 The Rise of Sedentary Life. In *Supplement to the Handbook of Middle American Indians, vol. 1: Archaeology*. V. Bricker and J. A. Sabloff (eds.), pp. 345–372. University of Texas Press.
- Stein, Gil J.
- 2010 Local Identities and Interaction Spheres: Modeling Regional Variation in the Ubaid Horizon. In *Beyond the Ubaid: Transformation and Integration in the Late Prehistoric Societies of the Middle East*. R. Carter and G. Phillips (eds.), pp. 23–44. Studies in Ancient Oriental Civilization number 63. Oriental Institute, University of Chicago.
- 2020 Leadership Strategies and the Multi-Linear Development of Social Complexity in Ubaid Mesopotamia and Susa A Southwestern Iran (5500–4000 BCE). In *Pathways through Arslantepe: Essays in Honour of Marcello Frangipane*. F. Balossi Restelli, A. Cardarelli, G. M. Di Nocera, L. Manzanilla, L. Mori, G. Palumbi and H. Pittman (eds.), pp. 173–187. Sapienza Università di Roma.
- Sugiyama, Saburo
- 2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership: Materialization of State Ideology at the Feathered Serpent Pyramid, Teotihuacan*. Cambridge University Press.
- Tolstoy, Paul
- 1978 Western Mesoamerica before A.D. 900. In *Chronology in New World Archaeology*. R. E. Taylor and C. W. Meighan (eds.), pp. 241–184. Academic Press.
- Tversky, Barbara
- 2019 *Mind in Motion: How Action Shapes Thought*. Basic Books.

- Wirth, Louis
1938 Urbanism as a Way of Life. *American Journal of Sociology* 44(1): 1–24.
- Wolf, Eric R. (editor)
1976 *The Valley of Mexico: Studies in Pre-Hispanic Ecology and Society*. University of New Mexico Press.
- Wright, Henry T.
2005 The Polycentricity of the Archaic Civilizations. In *A Catalyst for Ideas*. V. L. Scarborough (ed.), pp. 149–168. School of American Research.
- Yoffee, Norman
2005 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States and Civilizations*. Cambridge University Press.
- Yoffee, Norman with Nicola Terrenato
2015 Introduction: A History of the Study of Early Cities. In *The Cambridge World History Vol. III: Early Cities in Comparative Perspective, 4000 BCE-1200 CE*. N. Yoffee (ed.), pp. 1–24. University of Cambridge Press.

Between Social Integration and Differentiation:

The Origins of Urbanism in Ancient Mesoamerica

Tatsuya MURAKAMI*

Past research demonstrates that there were multiple pathways to urbanism in ancient Mesoamerica. In eastern Mesoamerica, ruling elites played a central role in organizing urban centers, as evidenced by stone monuments in the Gulf and Pacific Coast regions. In Central Mexico, however, religious symbolism associated with water served as a vital integrative mechanism. Across Central Mexico, rituals for rain and fertility were conducted at monumental pyramids using stone or clay water-basins and ritual items such as Storm God effigy vessels. Our research at Tlalancaleca, one of the largest cities in Formative Period Central Mexico (800 BC-AD 250), has documented these features and artifacts that would have served to socially integrate the entire city. Moreover, similar architecture and rituals recurred at smaller, intermediate-scale complexes to serve subgroups of the urban population. This indicates that building and ritual practices at multiple scales of social interaction were an important factor for urban development, a pattern which shaped the Central Mexican urban tradition and that was inherited by later cities, most notably Teotihuacan. This paper explores the origins of this Central Mexican urban tradition from the perspective of the macroregion, that is, a collection of contiguous regions that shared long-term historical interconnections. Specifically, this study addresses how the structure of the macroregion was transformed during the transition from the earlier Morelos-Guerrero tradition, which emphasized individual rulership, to the water and fertility associated urban tradition of Central Mexico. It argues that the development of urbanism was closely associated with the changing nature of social integration and differentiation in the macroregion.

Keywords

Central Mexico, Morelos-Guerrero, Origins of Urbanism, Macroregion

* Tulane University